第２編

第１章

神を悟る第一歩

祈願節

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥

oṁ namo bhagavate vāsudevāya

oṁ—おお主よ; *namaḥ*—あなたに敬意を表します; *bhagavate*—人格主神に; *vāsudevāya*—ヴァスデーヴァの子、主クリシュナに。

主よ。ヴァスデーヴァの子、シュリー・クリシュナよ、遍在する人格主神よ、あなた様に尊敬の礼をささげます。

要旨解説

Vāsudevāya（ヴァースデーヴァーヤ）は「ヴァスデーヴァの子、クリシュナに」という意味です。クリシュナ、ヴァースデーヴァの名前を唱えることで、慈善、苦行、改悛の優れた結果すべてを得ることができるため、この*oṁ namo bhagavate vāsudevāya*（オーム　ナモー　バハガヴァテー　ヴァースデーヴァーヤ）というマントラを唱えることで、『シュリーマド・バーガヴァタム』の著者、語り手、読者は、すべての喜びの源である至高主・クリシュナに敬意を表していることになります。『シュリーマド・バーガヴァタム』の第１編では創造の原理について説明されているため、第１編は「創造」と呼ばれています。

同じように第２編では、創造後の宇宙現象界について述べられています。さまざまな天体系が主の宇宙体の各部分として、第２編で解説されています。そのため、第２編は「宇宙現象界」と呼ぶことができます。第２編には10の章があり、各章のなかに、『シュリーマド・バーガヴァタム』の目的、そしてこの目的のさまざまな兆候について述べられています。最初の章では唱名の栄光について述べられていますが、初心の献愛者が主の宇宙体を瞑想できる方法についても述べられています。最初の節でシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、死ぬときになすべ

きことについて尋ねたマハーラージャ・パリークシットの質問に答えています。マハーラージャ・パリークシットはシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーを迎えたことを嬉しく思い、クリシュナの親友であるアルジュナの子孫であることを誇りに思いました。じつに謙虚な人物なのですが、主クリシュナが自分の祖父たち、すなわちパーンドゥの子息たちに、とりわけ自分の祖父であるアルジュナに優しかったことに感謝しています。そして、主クリシュナはいつでもマハーラージャ・パリークシットの家族に満足していたために、これから死のうとするかれが自己の悟りの方法をきわめられるように、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが遣わされました。マハーラージャ・パリークシットは幼いころから主クリシュナの献愛者でしたから、クリシュナに自然に愛情を感じていましたし、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーもその強い愛情を理解することができました。だから、なにをすべきか、というその質問を喜んで受けいれました。主クリシュナへの奉仕こそが全生命体の窮極の本務であることを王がほのめかしたことから、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはその思いを歓迎し、「あなたはクリシュナについて尋ねた。だからその質問は栄光に満ちている」と言いました。最初の節の訳が次のとおりです。

第 1 節

श्रीशुक उवाच
वरीयानेष ते प्रश्नः कृतो लोकहितं नृप ।
आत्मवित्सम्मतः पुंसां श्रोतव्यादिषु यः परः ॥ १ ॥

śrī-śuka uvāca
varīyān eṣa te praśnaḥ
kṛto loka-hitaṁ nṛpa
ātmavit-sammataḥ puṁsāṁ
śrotavyādiṣu yaḥ paraḥ

śrī-śukaḥ uvāca—シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが言った; *varīyān*—栄光に満ちた; *eṣaḥ*—これ; *te*—あなたの; *praśnaḥ*—質問; *kṛtaḥ*—あなたによってなされた; *loka-hitam*—全人類にとって有益な; *nṛpa*—王よ; *ātmavit*—超越主義者達; *sammataḥ*—承認されて; *puṁsām*—すべての人々の; *śrotavya-ādiṣu*—聞くことすべて; *yaḥ*—〜であるもの; *paraḥ*—至高。

シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが言った。「王よ。あなたの質問は栄光に満ちあふれている。だれにとっても有益だからである。この質問の答は、聞くという行為を満た

すもっともたいせつな主題であり、超越主義者たちにも認められている」

要旨解説

パリークシット王の質問そのものが、聞くにふさわしい最善の主題でしたから、すばらしい質問と讃えられています。そのような質問をし、その答えを聞くことで、もっとも最高かつ完璧な境地に到達することができます。主クリシュナは根源の至高の人物ですから、主にまつわる質問もすべて根源かつ完璧です。主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは、人生の最高完成はクリシュナへの超越的な愛情奉仕をすることである、と言いました。クリシュナに関連する質問と答は私たちをその超越的な境地に私たちを高めてくれますから、マハーラージャ・パリークシットのクリシュナの哲学に関連した質問は、高く讃えられています。マハーラージャ・パリークシットは、心を完全にクリシュナだけに没頭させたいと思いましたが、その思いは、クリシュナの非凡な活動について聞くだけで満たされます。たとえば『バガヴァッド・ギーター』では、主クリシュナの降誕・他界・活動の超越的な質を知るだけで、ふるさとへ、神のもとへ戻り、苦しい物質界にはぜったいに戻ってこない、と述べられています。ですから、いつもクリシュナについて聞く、という行為はたいへん吉兆なことなのです。だからこそマハーラージャ・パリークシットはシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーに、クリシュナの活動について話してください、そうすれば心をクリシュナに専念させられますから、と願ったのです。クリシュナの活動はクリシュナそのものです。クリシュナの超越的な活動を聞いているかぎり、私たちは物質存在の条件づけられた生活から離れていることができます。主クリシュナにまつわる主題は、話す人、聞く人、尋ねる人の心を清めてくれます。それらは、主クリシュナの足先から流れだしているガンジス川にたとえられます。ガンジス川がどこを流れようと、その場所を、そしてその水で沐浴する人を清めます。同じように、クリシュナ・カター（*kṛṣṇa-kathā*）・クリシュナの話題はとても純粋ですから、どこで語られても、その場所、聞く人、尋ねる人、話す人など、かかわるものすべてが浄化されます。

第２節

श्रोतव्यादीनि राजेन्द्र नृणां सन्ति सहस्रशः ।
अपश्यतामात्मतत्त्वं गृहेषु गृहमेधिनाम् ॥ २ ॥

śrotavyādīni rājendra
nṛṇāṁ santi sahasraśaḥ

apaśyatām ātma-tattvaṁ
gṛheṣu gṛha-medhinām

śrotavya-ādīni—聞く主題; *rājendra*—おお皇帝よ; *nṛṇām*—人間社会の; *santi*—～がある; *sahasraśaḥ*—何百何千もの; *apaśyatām*—盲目の人間の; *ātma-tattvam*—自己や窮極の真理に関する知識; *gṛheṣu*—家庭で; *gṛha-medhinām*—物質的な物事に熱中している者達の。

皇帝よ。物質的なことに没頭している者たちは、窮極の真理に関する知識に盲目であるため、人間社会のなかに聞く主題を数多く作りだしている。

要旨解説

啓示経典には、世帯者の生活を表わす２つの専門語があります。一つはグリハスタ（*gṛhastha*）、もう一つがグリハメーディ（*gṛhamedhī*）です。グリハスタは、妻や子どもたちと暮らしていても、窮極の真理を悟るために崇高な生活をしている人々を指します。いっぽうグリハメーディは、家族のためだけに（それが拡大された、あるいは集中された形であっても）生きているため、人々に嫉妬心をいだいています。メーディ（*medhī*）は他人を妬むことです。グリハメーディは家族のことだけを考えていますから、他人に嫉妬するのは当然です。ですから、あるグリハメーディは別のグリハメーディとは仲が悪く、拡大された家族のかかわりにしても、共同体、社会、国家など、利己的な関心しかないために互いに嫉妬しあっています。カリ時代になったいま、どの世帯者もほかの世帯者に嫉妬しています。窮極の真理に関する知識を知らないからです。かれらは聞こうとする主題――政治、科学、社会、経済など――をたくさん持っていますが、知識が貧弱なために、人生の窮極の苦しみ、すなわち誕生・死・老年・病気に関する知識を無視しています。じっさい、人間生活は生老病死から完全に解放されるためにあるのですが、グリハメーディは物質自然界に惑わされているために、自己の悟りに関することすべてを忘れています。人生の問題の窮極の解決は、ふるさとに、神のもとに帰ることにあり、それができてこそ『バガヴァッド・ギーター』（第８章・第16節）で述べられているように、物質存在の苦しみ――生老病死――を取りのぞくことができます。

ふるとに、神のもとに帰る方法は、至高主について、そして主の名前、姿、特質、崇高な娯楽、主にかかわるものごと、主の多様性について聞くことにあります。愚かな人々はこのことを知りません。それ以外の名前や姿などを聞きたいと思っていますが、どれもはかないものばかりで、なにかを聞こうとするそのきもちをどう活用して窮極の善を得たらいいのか知りません。かれらはまちがって導かれているために、窮極の真理者の名前・姿・特質についてまちが

った書物を作ったりします。ですから、ただ他人を妬んで生きるグリハメーディになってはいけません。経典の教えに従う正しい世帯者になるべきです。

第３節

निद्रया ह्रियते नक्तं व्यवायेन च वा वयः ।
दिवा चार्थेहया राजन् कुटुम्बभरणेन वा ॥ ३ ॥

nidrayā hriyate naktaṁ
vyavāyena ca vā vayaḥ
divā cārthehayā rājan
kuṭumba-bharaṇena vā

nidrayā—眠ることで; *hriyate*—無駄にする; *naktam*—夜; *vyavāyena*—セックスにふけること; *ca*—もまた; *vā*—どちらも; *vayaḥ*—寿命; *divā*—日々; *ca*—そして; *artha*—経済; *īhayā*—発達; *rājan*—王よ; *kuṭumba*—家族達; *bharaṇena*—維持している; *vā*—どちらも。

そのような嫉妬深い世帯者の生活は、夜は眠ることとセックスに溺れることに使われ、昼は金を稼ぐか、家族を維持するために使われている。

要旨解説

現在の人間文化は、夜は眠ることとセックスにふけること、日中はカネを稼ぎ、家族の維持のために働くことにもとづいています。そのような文化はバーガヴァタの学者によって非難されています。

人間生活は物質と精神の組み合わせですから、ヴェーダ知識はすべて、精神魂を物質の穢れから解放させることに向けられています。このことに関連する知識をアートマ・タットヴァ（*ātma-tattva*）と言います。あまりにも物質主義的な人々はこの知識を知らず、物質的な楽しみを味わうための経済発展に心を向けています。そのような物質主義的な人々をカルミー、すなわち結果にこだわる労働者といい、かれらは規制された経済発展に、あるいは性的楽しみのための女性との交わりが許されています。いっぽう、カルミーを超えた人々、すなわちギャーニー、ヨーギー、献愛者たちは性的なことにかかわることが禁じられています。カルミーは多かれ少なかれアートマ・タットヴァを知らないため、かれらの生活は精神的な利益とは関係なく使われています。人間生活は経済発展のための重労働、あるいは犬や豚のようにセックスに

ふけるために用意されたのではありません。物質的な生活、そしてそのために生じる苦しみという問題を解決させるためにあるのです。しかしカルミーたちは、夜はセックスにおぼれ、昼は財産をためるために重労働にはげんで時間を無駄にし、そうすることで物質主義的な生活をよりよいものにしようとしています。物質主義的な生き方がここで要約され、そして愚かな人々が人間生活という恩恵をどのように無駄にしているかが、次のように説明されていきます。

第 4 節

देहापत्यकलत्रादिष्वात्मसैन्येष्वसत्स्वपि ।
तेषां प्रमत्तो निधनं पश्यन्नपि न पश्यति ॥ ४ ॥

dehāpatya-kalatrādiṣv
ātma-sainyeṣv asatsv api
teṣāṁ pramatto nidhanaṁ
paśyann api na paśyati

deha—体; *apatya*—子ども達; *kalatra*—妻; *ādiṣu*—そしてそれらに関連するすべての物事; *ātma*—自分の; *sainyeṣu*—戦う兵士達; *asatsu*—過ちを犯す; *api*—〜にもかかわらず; *teṣām*—それらすべての; *pramattaḥ*—過度に執着して; *nidhanam*—破滅; *paśyan*—経験してきて; *api*—〜ではあるが; *na*—〜しない; *paśyati*—それを見る。

アートマ・タットヴァを知らない者たちは、「あてにならない兵士」ともいうべき体、子ども、妻などに強く執着しているために、人生の問題について問おうとしない。これまでなんどもまのあたりにしてきたというのに、避けられない破滅が見えないのである。

要旨解説

物質界は死の世界と呼ばれています。何百万年もの寿命を持つブラフマーから数秒間しか生きられない細菌にいたるまで、すべての生命体が生存競争をしています。ですから私たちの一生は、だれをも死におとしいれる物質自然界との戦いと言えるでしょう。人間になった生命体は、この厳格な生存競争の正体が理解できるのですが、家族、社会、国などに執着しすぎているため、体力、子ども、妻、親戚などの助けで、勝てるわけのない物質自然界と戦って勝とうとしています。これまでの経験をとおして充分にわかっているはずなのに、子ども、親戚、社会の人々という頼るべき戦士たちすべてが、やがては苦闘のはてに破滅していくことが見えま

せん。自分の父も、その父の父もすでに死に、自分もやはり必ず死に、子どもの親になるだろう自分の子どももやがては死んでいくのですから、人はそういうものであることを心得ておかなくてはなりません。だれであっても、物質自然界との競争で生き残ることはできません。人間社会の歴史がそのことを証明しているというのに、愚かな人たちは、将来、人は物質科学の助けを得て永遠に生きられるようになる、と豪語したりします。人間社会に見られるこの貧弱な知識は精神魂の本質を無視した結果であり、そして人をまちがって導くものです。この物質界に執着している私たちにとって、この世界は夢として存在しています。さもなければ、精神魂はいつでも、物質自然界とは違った存在です。物質自然界という広大な海は「時」という波を作り、いわゆる生活環境は泡のようなもので、私たちのまえに体、妻、子ども、社会、同国人などとして現われます。自己の知識がないために、私たちは無知の力の犠牲になり、こうして、「永遠な生活」という物質界ではありえないことを追求するむなしい努力をしながら、人間生活という価値あるエネルギーを無駄にしています。

友人、親戚、また妻、子どもたちはあてにならない存在であることはもちろん、物質存在という表面的な魅力に惑わされている人たちばかりです。そのようなかれらが私たちを救ってくれるわけがありません。それでも私たちは、家族、社会、国のなかにいさえすれば安全だと考えています。

人間文化の物質主義に支えられた発達はすべて、死体の飾りのようなものです。世のすべての人々は、数日間動きまわっている死体にすぎないのですが、それでも、人間生活の全エネルギーがこの死体を飾ることに無駄に使われています。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、混乱した人間の活動の真相をしめしたあと、人類がなすべきことを指摘しています。アートマ・タットヴァの知識のない人々はまちがって導かれているのですが、主の献愛者、そして超越的知識を完璧に悟った人々は惑わされていません。

第５節

तस्माद्भारत सर्वात्मा भगवानीश्वरो हरिः ।
श्रोतव्यः कीर्तितव्यश्च स्मर्तव्यश्चेच्छताभयम् ॥ ५ ॥

tasmād bhārata sarvātmā
bhagavān īśvaro hariḥ
śrotavyaḥ kīrtitavyaś ca
smartavyaś cecchatābhayam

tasmāt—この理由のために; *bhārata*—バラタの子孫よ; *sarvātmā*—至高の魂; *bhagavān*—最高人格主神; *īśvaraḥ*—支配者; *hariḥ*—すべての苦痛を消しさる主; *śrotavyaḥ*—〜は聞かれるべき; *kīrtitavyaḥ*—讃えられるべき; *ca*—もまた; *smartavyaḥ*—思い出されるべき; *ca*—そして; *icchatā*—望む者の; *abhayam*—自由。

バラタ王の子孫よ。いっさいの苦しみから解放されたいと望む者は、至高の魂、支配者、苦悩の救世者である人格主神について聞き、その方を讃え、また思いださなくてはならない。

要旨解説

シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは前の節で、物質生活に執着している愚かな人々が、眠ること、性生活にふけること、経済的状況を改善させること、消滅する定めにある親族という仲間を維持するために、忘却の世界で貴重な時間を無駄にしていると説明しました。精神魂はこのような物中心の活動に夢中になり、果報的活動の法則のサイクルにみずからを陥っています。その結果として、840万種類の生物種のなかでの誕生と死の鎖に必然的に絡まることになります。そして水中生物、野菜、爬虫類、鳥、動物、未開人、そしてふたたび人間の姿になり、ここにきて果報的活動のサイクルから抜けだすチャンスが与えられます。ですから、この悪循環から解放されたいと思う人は、カルミー、すなわち自分がしたことの善悪の結果を楽しもうとすることをやめなくてはなりません。良いことであろうと悪いことであろうと、それは自分のためではなく、存在するものすべての窮極の所有者である至高主のためにすべきです。その方法が『バガヴァッド・ギーター』（第９章・第27節）で勧められており、すべてを主のためにするよう教えられています。ですから、まず主について聞くことが先決です。完璧に、入念に聞いたあとは主の行動を讃えなくてはなりませんし、讃えることで主の超越的な質をいつも思っていられるようになります。主が賞賛される言葉を聞くことそのものが主の超越的な質と同じであり、そうすることで、私たちは主といつもふれあっていることになります。その結果、あらゆる恐怖から解放されていきます。主は全生命体の心臓に住んでいる至高の魂（パラマートマー）であり、上記のような聞く方法と讃える方法をとおして、主は私たちを主の創造界にいるすべての生命体との交流に招きます。主について聞いて主を唱えるという方法は、だれにもふさわしく、だれでも実践できるものであり、神意かもしれないすべての活動をとおして窮極の成功に導かれていきます。人間にもさまざまな段階があります——果報的活動者、経験主義哲学者、神秘主義ヨーギー、そして最後に純粋無垢な献愛者です。このすべての人たちが同じ方法を実践し、望ましい成功を達成することができます。だれでも、あらゆる恐怖から解放されたいと思っていますし、申し分のない幸福な生活を求めています。この境地を

すぐに達成する完璧な方法が『シュリーマド・バーガヴァタム』で勧められており、それがシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーという偉大な権威者によってしめされています。主について聞き、主を讃えることで、万人の活動が精神的活動になり、物質的苦痛の概念はすべて完璧に消滅されるのです。

第６節

एतावान् सांख्ययोगाभ्यां स्वधर्मपरिनिष्ठया ।
जन्मलाभः परः पुंसामन्ते नारायणस्मृतिः ॥ ६ ॥

etāvān sāṅkhya-yogābhyāṁ
sva-dharma-pariniṣṭhayā
janma-lābhaḥ paraḥ puṁsām
ante nārāyaṇa-smṛtiḥ

etāvān—これらすべて; *sāṅkhya*—物質と精神に関する完璧な知識; *yogābhyām*—神秘的力に関する知識; *sva-dharma*—特定の定められた義務; *pariniṣṭhayā*—完全な理解によって; *janma*—誕生; *lābhaḥ*—利益; *paraḥ*—至高者; *puṁsām*—人の; *ante*—最期に; *nārāyaṇa*—人格主神; *smṛtiḥ*—記憶。

人間生活の最高完成は、物質と精神に関係する完璧な知識であろうと、神秘的力の修練であろうと、あるいは定められた義務を完璧に実践することであろうと、人生の最期に人格主神を思いだすことにある。

要旨解説

ナーラーヤナは物質創造界を超えた超越的な人格主神です。すべてはマハトゥ・タットヴァ（物質原則）の世界のなかで創造され、維持され、そして最後に破壊され、それが物質界と知られています。ナーラーヤナ・人格主神の存在は、このマハトゥ・タットヴァの範囲にはなく、そのため、ナーラーヤナの名前、姿、特質などは物質界の範囲を超えています。物質と精神を識別する経験哲学という推測によって、あるいは修練者を宇宙内のどの惑星にでも、この宇宙を超えた惑星にでも到達することを助けてくれる神秘的な力の修練によって、またあるいは宗教上の義務を遂行することによって、最高完成を達成することができますが、それはナーラーヤナ・スムリティ（*nārāyaṇa-smṛti*）、すなわち人格主神を絶えず思い出している境地に到達

していればのことです。これは、純粋な献愛者という、経典が定義する定められた義務に関連したすべてのギャーニー、ヨーギー、カルミーたちの超越的な活動に最終的な仕上げを与える人物によって可能になるものです。精神的完成を達成した歴史的な実例は数多く残されており、たとえばサナカーディ・リシ、９人の名高いヨーゲーンドラたちは、主への献愛奉仕に位置されたすぐにあとに完成の境地を達成しました。主の献愛者はだれひとりとして、ギャーニーやヨーギーがするようなほかの方法を始めて、献愛奉仕の道から逸れることはぜったいにありません。だれでも自分に定められた活動の最高完成を達成したいと望んでおり、ここでは、その完成をナーラーヤナ・スムリティといい、だれもがそのために最善をつくさなくてはならない、としめされています。言いかえれば、私たちの生涯は、生きていくなかで毎瞬間人格主神のことが思いだしていられるよう整えなくてはならない、ということです。

第７節

प्रायेण मुनयो राजन्निवृत्ता विधिषेधतः ।
नैर्गुण्यस्था रमन्ते स्म गुणानुकथने हरेः ॥ ७ ॥

prāyeṇa munayo rājan
nivṛttā vidhi-ṣedhataḥ
nairguṇya-sthā ramante sma
guṇānukathane hareḥ

prāyeṇa—おもに; *munayaḥ*—すべての聖者達; *rājan*—王よ; *nivṛttāḥ*—～を超えて; *vidhi*—規定原則; *ṣedhataḥ*—制限から; *nairguṇya-sthāḥ*—超越的境地にいる; *ramante*—～に喜びを感じる; *sma*—明白に; *guṇa-anukathane*—栄光を讃えている; *hareḥ*—主の。

パリークシット王よ。規則や禁制を超越した境地にいる頂点の超越主義者たちは、おもに主の栄光を話すことに喜びを感じている。

要旨解説

頂点の超越主義者は解放された魂であり、そのため規定原則の範囲を超えています。これから精神的境地に高められようとする初心の献愛者は、規定原則のもとで精神指導者に導かれる立場にいます。医学上のさまざまな制約のもとで治療を受けている患者、といえるかもしれません。一般的に、解放された魂たちでも超越的な活動について説明することに喜びを感じるも

のです。上記のように、ナーラーヤナ、ハリ、人格主神は物質創造界を超えているため、その姿や特質は物質的ではありません。頂点の超越主義者あるいは解放された魂は、超越的知識を学ぶことで高尚な経験をして主を悟るため、超越的な質にあふれた主の崇高な娯楽について話して喜びを感じます。『バガヴァッド・ギーター』（第４章・第９節）で人格主神は、わたしの降誕と活動はどれも*divyam*（デヴァンム）超越的である、と宣言しています。物質エネルギーに魅せられている一般の人々は、主も自分と同じ、と当たりまえのように考えているため、主の姿や名前などはすべて超越的である、という教えが受けいれられません。頂点の超越主義者は物質的なものにはいっさい関心がなく、主の活動という主題だけに没頭していることが、主は物質界にいる私たちとはまったく違うという事実を如実に表わしています。ヴェーダ経典でも確証されているように、至高主は一人しかいませんが、無垢な献愛者たちとともに超越的な娯楽を繰りひろげ、同時に、バラデーヴァの拡張体である至高の魂として私たちの心臓のなかにいます。ですから、超越的悟りの最高完成は、主の超越的な質について聞き、そして説明することに喜びを感じることにあり、非人格論の一元論者が求めているブラフマンの存在に没入することではありません。真の超越的喜びは超越的な主の称讃にあり、主の姿と人格のない様相に没入することではありません。しかし、頂点の超越主義者のほかに、とくに喜びを感じることなく主の超越的な活動を説明する低次元の超越主義者もいます。かれらは、主の存在のなかに没入することを目的に、主の活動について形式的に話しあっているにすぎません。

第８節

इदं भागवतं नाम पुराणं ब्रह्मसम्मितम् ।
अधीतवान् द्वापरादौ पितुर्द्वैपायनादहम् ॥ ८ ॥

idaṁ bhāgavataṁ nāma
purāṇaṁ brahma-sammitam
adhītavān dvāparādau
pitur dvaipāyanād aham

idam—この; *bhāgavatam*—『シュリーマド・バーガヴァタム』; *nāma*—その名前の; *purāṇam*—ヴェーダの補足書; *brahma-sammitam*—ヴェーダの真髄と認められて; *adhītavān*—研究した; *dvāpara-ādau*—ドゥヴァーパラ・ユガの終わりに; *pituḥ*—私の父から; *dvaipāyanāt*—ドゥヴァイパーヤナ・ヴャーサデーヴァ; *aham*—私自身。

私はドゥヴァーパラ・ユガの終わりに、あらゆるヴェーダに匹敵し、偉大なるヴェーダ経典の補足書である『シュリーマド・バーガヴァタム』というこの偉大なるヴェーダ経典を、私の父シュリーラ・ドゥヴァイパーヤナ・ヴャーサデーヴァから学んだ。

要旨解説

規則や禁制を超えた頂点の超越主義者たちは、おもに人格主神について聞いて讃えることに没頭する、というシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの言葉が、かれ自身の実体験としてしめされています。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、だれもが認める解放された魂として、そして頂点の超越主義者として、マハーラージャ・パリークシットが迎える最後の７日間に居合わせた頂点の聖者たちに受けいれられました。そして自分自身が主の超越的な活動に魅せられ、偉大なる父親であるシュリー・ドゥヴァイパーヤナ・ヴャーサデーヴァから『シュリーマド・バーガヴァタム』を学んだというみずからの経験を語りました。『シュリーマド・バーガヴァタム』、あるいはその他の科学的文献についても同じことが言えるのですが、自宅で自分の知的能力を使って学ぶことはできません。解剖学の医学者とか哲学書は書店で手に入りますが、自宅でそういう本を読んでもちゃんとした資格のある医師にはなりません。医科大学に入り、博識な教授に導かれて書物を研究しなくてはならないのです。同じように、『シュリーマド・バーガヴァタム』という神に関する科学の大学院的研究は、シュリーラ・ヴャーサデーヴァのような悟った魂の蓮華の御足のもとで研究してこそ学べるものです。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは誕生したその日から解放された魂でしたが、なおかつ、偉大な父であり、またシュリー・ナーラダ・ムニという別の偉大な魂の教えのもとで『シュリーマド・バーガヴァタム』を編纂したヴャーサデーヴァから講義を受けなくてはなりませんでした。主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは、ある博識なブラーフマナに「物のバーガヴァタから『シュリーマド・バーガヴァタム』を学びなさい」と教えました。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、至高の人物の超越的な名前・姿・特質・娯楽・身の回りの物事・多様性について、人格主神の化身であるシュリーラ・ヴャーサデーヴァによって語れました。主の崇高な娯楽は純粋な献愛者と協力して繰りひろげられ、したがって、歴史的な出来事が（クリシュナに関連しているため）この偉大な文献に含まれています。この本は*brahma-sammitam*（ブラフマ・サンミタンム）とも呼ばれていますが、それは、『バガヴァッド・ギーター』と同じように、主クリシュナの音の表われだからです。『バガヴァッド・ギーター』は至高主によって語られたものですから主の音の化身で、そして『シュリーマド・バーガヴァタム』は、主の活動について主の化身によって語られたものですから主の音の表われです。この本のはじまりに述べられて

いるように、これはヴェーダという望みの木の真髄であり、ブラフマンという主題に関する頂点の哲学的学術書である『ブラフマ・スートラ』に対する自然な解説書です。ヴャーサデーヴァはドゥヴァーパラ・ユガの終わりにサテャヴァティーの子息として現われ、そのため、この節にある「ドゥヴァーパラ・ユガのはじまり」をしめす*dvāpara-ādau*（ドゥヴァーパラ・アーダウ）という言葉は、カリ・ユガがはじまる直前であることをしめしています。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーによると、この表現は、木の上部を「はじまり」と呼ぶことと比較されています。つまり、木の根は確かにその木のはじまりなのですが、事実として言えることは、木の上部が最初に見られる、という点にあります。このことから、木の生長の最終点がその木のはじまり、と言われているのです。

第９節

परिनिष्ठितोऽपि नैर्गुण्य उत्तमश्लोकलीलया ।
गृहीतचेता राजर्षे आख्यानं यदधीतवान् ॥ ९ ॥

pariniṣṭhito 'pi nairguṇya
uttama-śloka-līlayā
gṛhīta-cetā rājarṣe
ākhyānaṁ yad adhītavān

pariniṣṭhitaḥ—完全に悟った; *api*—〜にかかわらず; *nairguṇye*—超越性の中に; *uttama*—啓発された; *śloka*—節; *līlayā*—娯楽によって; *gṛhīta*—魅了されて; *cetāḥ*—注意; *rājarṣe*—神聖な王よ; *ākhyānam*—描写; *yat*—それ; *adhītavān*—私は研究した。

おお神聖な王よ。確かに私は超越的な境地にいる。しかし、悟りに満ちた節をとおして説明されている主の崇高な娯楽の説明を聞いて、そのとりこになるのだ。

要旨解説

絶対真理者は、哲学的な推論をとおしてまず非人格のブラフマンとして悟られ、さらに超越的知識を高めることで至高の魂（パラマートマー）として悟られます。しかしもし、主の恩寵を授かった非人格論者が『シュリーマド・バーガヴァタム』にある優れた説明で啓発を受ければ、人格主神の超越的な献愛者に変貌します。貧弱な知識では絶対真理者の人格性を理解に到達することはできませんし、主の個人としての活動は、知性に欠ける非人格論者にはどうして

も受けいれられません。しかし、絶対真理者に近づこうとする超越的な方法が分別と論拠とあいまって、強情な非人格論者でも主の個人としての活動に心惹かれることがあります。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような人物は、俗な活動に惹かれることはありませんが、そのような献愛者でも、優れた方法をとおして納得すれば、必ず主の超越的な活動に魅了されます。主は、その活動を見ればわかるように、超越的な方です。無活動でも非人格でもありません。

第１０節

तदहं तेऽभिधास्यामि महापौरुषिको भवान् ।
यस्य श्रद्दधतामाशु स्यान्मुकुन्दे मतिः सती ॥ १० ॥

tad ahaṁ te 'bhidhāsyāmi
mahā-pauruṣiko bhavān
yasya śraddadhatām āśu
syān mukunde matiḥ satī

tat—それ; *aham*—私; *te*—あなたたちに; *abhidhāsyāmi*—吟唱しよう; *mahā-pauruṣikaḥ*—主クリシュナのもっとも誠実な献愛者; *bhavān*—あなたたち; *yasya*—～であるものの; *śraddadhatām*—完全な敬意と集中を傾ける者の; *āśu*—まもなく; *syāt*—そのようになる; *mukunde*—解放を与える主に; *matiḥ*—信念; *satī*—揺るぎない。

その『シュリーマド・バーガヴァタム』をみなさんに語ろう。主クリシュナのもっとも真剣な献愛者である方たちばかりだからだ。『シュリーマド・バーガヴァタム』を一心不乱に聞き、敬意を捧げる者は、解放を授ける至高主に対する揺るぎない信念を手に入れるのである。

要旨解説

『シュリーマド・バーガヴァタム』はだれもが認めるヴェーダ知恵であり、そのヴェーダ知識を授かる方法をアヴァローハ・パンター（*avaroha-panthā*）、ほんものの師弟継承をとおして超越的を受けいれる方法、といいます。物質的知識を高めるためには各個人の能力と判断力が要求されますが、精神的知識の場合、その伝わり方はほとんどが精神指導者の慈悲にかかっています。精神指導者は弟子の心がまえに満足しなくてはならず、その条件が満たされてこそ、精神的科学を学ぶ生徒のまえに真実はおのずと表わされるものです。しかし、その方法が怪しげな魔術を使ったような手段、つまり精神指導者が弟子に電流でも流しこむかのような魔術で

教えを授ける、といったメージで誤解されることがあってはなりません。ほんものの精神指導者は、ヴェーダの知恵という権威にもとづいてすべてを弟子に説明します。弟子はその教えをただ知力をとおして授かるのではなく、謙虚な質問と奉仕の態度で受けいれます。そこに流れているのは、精神指導者も弟子も誠実である、という考えです。この場合、精神指導者はシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーで、偉大な父・シュリーラ・ヴャーサデーヴァから学んだことをそのまま説き、また弟子のマハーラージャ・パリークシットは、主クリシュナの偉大な献愛者です。献愛者は、主の献愛者になりさえすれば精神的なものすべてが授かる、と誠実に信じています。この教えは主みずから『バガヴァッド・ギーター』のすべてのページに刻まれ、そこには、「主（シュリー・クリシュナ）がすべてであり、主にすべてをゆだねる人は、完全に敬虔な人物になる」と明確に説明されています。主クリシュナに対するこの揺るぎない信念が、『シュリーマド・バーガヴァタム』の生徒になる心の準備を築き、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような献愛者から『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞く人は、マハーラージャ・パリークシットのように、最後には必ず解放の境地に到達します。『シュリーマド・バーガヴァタム』の職業吟唱家や１週間聞くだけの偽物献愛者は、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーとマハーラージャ・パリークシットとは似ても似つかない輩です。シュリーラ・ヴャーサデーヴァは『シュリーマド・バーガヴァタム』を*janmādy asya*（ジャンマーディ　アッシャ）という最初の節（SB 1.1.1）から説明し、またシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーも、王に同じ内容を説明しました。主クリシュナは、『シュリーマド・バーガヴァタム』（第11編）で、マハープルシャ（Mahāpuruṣa）と述べられています。その箇所では、主がシュリー・チャイタンニャ・マハープラブという献愛者の姿で現われることが述べられています。シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは献愛奉仕をする献愛者として現われた主クリシュナ自身であり、カリ時代にいる堕落した魂たちに特別の恩寵を授けるために降誕しました。主クリシュナのマハープルシャ様相に捧げるにふさわしい２つの祈りがあります。

dhyeyaṁ sadā paribhava-ghnam abhīṣṭa-dohaṁ
tīrthāspadaṁ śiva-viriñci-nutaṁ śaraṇyam
bhṛtyārti-haṁ praṇata-pāla bhavābdhi-potaṁ
vande mahā-puruṣa te caraṇāravindam

(*SB 11.5.33*)

tyaktvā su-dustyaja-surepsita-rājya-lakṣmīṁ
dharmiṣṭha ārya-vacasā yad agād araṇyam

māyā-mṛgaṁ dayitayepsitam anvadhāvad
vande mahā-puruṣa te caraṇāravindam

(*SB* 11.5.34)

言いかえると、プルシャは享楽者、そしてマハープルシャは至高の享楽者、すなわち最高人格主神・シュリー・クリシュナを指している、ということです。至高主シュリー・クリシュナに近づくにふさわしい人をマハー・パウルシカ（*mahā-pauruṣika*）といいます。ほんものの吟唱者から注意深く『シュリーマド・バーガヴァタム』について聞く人ならだれでも、解放を授けることのできる主の誠実な献愛者に確実になれます。『シュリーマド・バーガヴァタム』を一心に聞くことでマハーラージャ・パリークシットを凌ぐ人物はおらず、『シュリーマド・バーガヴァタム』の節を語ることでシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーを凌ぐ人物はいません。ですから、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーとマハーラージャ・パリークシットという二人の理想的な吟唱者と傾聴者の足跡に従う人は、だれであっても、まちがいなく二人のような解放を手に入れます。マハーラージャ・パリークシットは聞くだけで解放を達成し、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは語るだけで解放を達成しました。話すことと聞くことという２つの方法は、９つの献愛奉仕の活動に含まれ、この原則に熱心に従えば、それが完全でも部分的であっても、絶対的な境地を達成することができます。ですから、『シュリーマド・バーガヴァタム』の*janmādy asya*（ジャンマーディ　アッシャ）という最初の節（SB 1.1.1）から最後の第12編の最後の節（SB 12.13.23）にいたる完璧な原文が、マハーラージャ・パリークシットの解放が達成されるよう、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって語られたのです。『パドゥマ・プラーナ』では、ガウタマ・ムニがマハーラージャ・アンバリーシャに、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって語られたように、定期的に『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞くよう助言した、とあり、そのなかでは、マハーラージャ・アンバリーシャが、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって語られたように『シュリーマド・バーガヴァタム』を最初から最後まで聞いた、と言われています。ですから、『シュリーマド・バーガヴァタム』にほんとうに関心をいだいている人は、この部分、あの部分という適当な形で読んだり聞いたりするべきではありません。マハーラージャ・アンバリーシャやマハーラージャ・パリークシットのような偉大な王たちの足跡に従い、そしてシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのほんものの代表者から聞かなくてはなりません。

第１１節

एतन्निर्विद्यमानानामिच्छतामकुतोभयम् ।
योगिनां नृप निर्णीतं हरेर्नामानुकीर्तनम् ॥ ११ ॥

etan nirvidyamānānām
icchatām akuto-bhayam
yoginām nṛpa nirṇītaṁ
harer nāmānukīrtanam

etat—それは〜である; *nirvidyamānānām*—物質的望みをいっさい持たない者達の; *icchatām*—あらゆる物質的楽しみを望んでいる者達の; *akutaḥ-bhayam*—疑いと恐れのいっさいない; *yoginām*—みずから満足している者達の; *nṛpa*—王よ; *nirṇītam*—決定された真理; *hareḥ*—主、シュリー・クリシュナの; *nāma*—聖なる名前; *anu*—誰かに従い、いつも; *kīrtanam*—唱えている。

王よ。偉大な権威者たちが説く方法に従って主の聖なる名前をいつも唱えることは、だれにとっても、すなわち物質的な望みがなにもない者、物質的な楽しみをすべて望む者、そして超越的な知識の力でみずから満足している者にとっても、疑いも恐れもない成功を手に入れる方法である。

要旨解説

前の節では、ムクンダに執着する必要性が確証されています。さまざまな分野で成功を求める多くの人々がいます。しかし多かれ少なかれ、そのほとんどが物質的な満足を最大限楽しもうとする物質主義者です。かれらの次に、物質的な楽しみがどのようなものであるかを説く完璧な知識を得た超越主義者がおり、幻想にすぎない物質的な生活にはかかわりません。自己を悟ることで満たされている人たちばかりです。さらに高い境地には主の献愛者がおり、物質界を楽しみも捨てもしません。主の、主クリシュナを満足させたいとだけ思っています。言いかえると、主の献愛者は自分だけの利益を欲しがらない、ということです。主が望めば物質的な便宜はすべて受けいれ、望まなければそのような便宜はすべて、解放の境地さえ、捨てることができます。また、自分を満足させることさえ考えない。主の満足だけを望んでいるから。節でシュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、主の聖なる名前の超越的唱名を勧めています。聖なる名前を冒涜することなく唱えたり聞いたりする人は、主の超越的な姿に精通し、次に主の特質に、そして主の崇高な娯楽などに精通するようになっていきます。そしてこの節

では、主の聖なる名前について権威者から聞いたあとはその名前をいつも唱えるべきである、とも述べられています。これは、権威者から聞くことがなによりもたいせつだということです。聖なる名前を聞く人は、主の姿、特質、娯楽などについて聞く境地に徐々に高められ、こうして主の栄光を唱える必要性が首尾よく達成されていきます。この過程は、献愛奉仕をじょうずに実践するためだけではなく、物質的なことに執着している人たちにも勧められています。シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによると、こうして成功を達成する方法は決定的な事実であり、かれだけではなく、先代のアーチャーリャたちも断言していることです。ですから、これ以上証拠を挙げる必要はありません。この方法は、さまざまな理論の成功を求める積極的な生徒だけではなく、果報的活動者、哲学者、主の献愛者として成功を収めている人たちにも勧められています。

シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーによると、主の聖なる名前は大声でなされるものであり、また『パドゥマ・プラーナ』で勧められているように名前に対する冒涜を犯すことなくなされなくてはなりません。主になにもかも身をゆだねることで、すべての罪の結果から自分を救うことができます。そして主の聖なる名前に身をゆだねることで、主の御足に対する冒涜からも自分を救うことができます。しかし、主の聖なる名前という御足を冒涜してしまえば、自分を救う守ることはできません。そのような冒涜には10種類あることが『パドゥマ・プラーナ』で述べられています。最初の冒涜は、主の栄光を世に広めている偉大な献愛者を中傷することです。２番目の冒涜は、主の聖なる名前を俗な特質にもとづいて判断することにあります。主は全宇宙の所有者ですから、さまざまな場所でさまざまな名前で呼ばれていますが、そのために主の完全性まで変わってしまうわけではありません。至高主を指す特定の言葉はどれも主のためにあるものですから、どの名前も神聖な気質をそなえています。そのような聖なる名前には主と同じ力があり、この創造界のどの場所のどの人たちでも、それぞれの理解にもとづいて主の特定の名前を唱えたり讃えたりしても、なんの障害もありません。どれも吉兆な名前ですから、どの名前が精神的で、その名前が物質的である、などと区別してはなりません。３番目の冒涜は、権威あるアーチャーリャや精神指導者の命令を無視することです。４番目の冒涜は、経典やヴェーダ知識を非難することです。５番目は、自分の俗な判断で主の聖なる名前を定義づけてしまうことです。主の聖なる名前は主とまったく同じですから、その聖なる名前と主はまったく変わらない、と理解しなくてはなりません。６番目の冒涜は、聖なる名前を自分勝手に解釈することです。主も、そして主の聖なる名前も想像して作られたわけではありません。主は崇拝者たちが想像したものであり、だからその名前も想像上のもの――と考える貧弱な知識の者たちがいます。主の名前をそのようなきもちで唱えても、その唱名で望むべき成功

を達成することはできません。７番目の冒涜は、聖なる名前の力に頼って意図的に罪を犯すことにあります。経典には、主の聖なる名前を唱えるだけですべての罪の反動から解放される、と述べられています。この超越的な方法をまちがって使い、聖なる名前を唱えれば罪の結果をすべて中和されることを期待して罪を犯しつづける者がいますが、それこそ、聖なる名前の御足に対する最悪の冒涜です。そのような冒涜者は、浄化のために勧められている方法をすべて実行しても、自分を純粋にすることはできません。言いかえると、主の聖なる名前を唱えるまえは罪な人間だったとしても、聖なる名前に身をゆだね、罪の反動から解放されたあとは、聖なる名前を唱えさえすれば自分は守られると思いながら罪を犯しつづけてはいけない、ということです。８番目の冒涜は、主の聖なる名前、そしてその名を唱える方法を、物質的で吉兆な活動の一つである、と考えることにあります。物質的な恩恵を得るためのさまざまな優れた活動がありますが、聖なる名前とその唱名は、たんなる吉兆で神聖な奉仕ではありません。確かに、聖なる名前は聖なる奉仕なのですが、俗な目的のために主を利用するべきではありません。主の聖なる名前と主はまったく同じものですから、聖なる名前を人類への物質的奉仕の段間に落としてはなりません。たいせつなことは、至高主は至高の享楽者だという点にあります。主は、だれかの召使いでも、だれかになにかを供給する者でもありません。同じように、聖なる名前は主と同じものですから、聖なる名前を自分の奉仕のために利用してはなりません。

９番目の冒涜は、主の聖なる名前を唱えることや聖なる名前の質に関心のない相手に教えを説くことにあります。聞きたいとも思っていない相手にそのような教えを説くと、その行為は聖なる名前の御足に対する冒涜と考えられます。10番目の冒涜は、聖なる名前の超越的な質について聞いたあとでも、興味を持てないことにあります。唱名する人は、聖なる名前の唱名の効果を「偽の利己心からの解放」として感じます。まちがった利己心は、自分が世界を楽しむ、世界にあるものすべては自分の楽しみのためだけにある、と考えることで表われます。物質主義的な社会全体は、そのような「私」とか「私のもの」という利己心で動いていますが、聖なる名前の唱名の真の結果は、そのようなまちがった考え方から解放されることにあります。

第１２節

किं प्रमत्तस्य बहुभिः परोक्षैर्हायनैरिह ।
वरं मुहूर्तं विदितं घटते श्रेयसे यतः ॥ १२ ॥

kiṁ pramattasya bahubhiḥ
parokṣair hāyanair iha

varaṁ muhūrtaṁ viditaṁ
ghaṭate śreyase yataḥ

kim—何か; *pramattasya*—困惑した者の; *bahubhiḥ*—多く; *parokṣaiḥ*—未経験; *hāyanaiḥ*—年月; *iha*—この世界で; *varam*—より良い; *muhūrtam*—一瞬; *viditam*—意識する; *ghaṭate*—〜を試みることができる; *śreyase*—最高の関心に関連して; *yataḥ*—それによって。

無駄にすごし、なんの経験も積まずに長生きして、そんな生き方にどれほどの価値があるだろうか。ほんの一瞬であっても完璧な意識ですごすほうがましではないか。そのほうが、自分にとって最上の関心を探求する始まりになるのだから。

要旨解説

シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、向上的な人すべてが主の聖なる名前を唱えることの重要性について、マハーラージャ・パリークシットに教えました。７日間の余命に直面した王を勇気づけるため、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが強調したのは、人生の問題に関する知識もなく何百年間生きても無益なことである――それよりは、最上の関心を達成するために完全な意識で一瞬を生きるほうがましである、という教えです。生涯で求めるべき最上の関心は、永遠で、知識と喜びに満ちています。物質界の外界の様相に惑わされ、「食べて、飲んで、楽しむ」という動物じみた感情で暮らしている人々は、目に見えないうちに過ぎ去る時の流れのなかで貴重な歳月を無駄にしています。完璧な意識で理解すべきことは、「人間生活は精神的成功を達成するために条件づけられた魂に用意されたものであり、この最終目標を手に入れるもっともかんたんな方法は、主の聖なる名前の唱名である、という教えです。この点について前の節である程度説明しましたが、聖なる名前の御足に対するさまざまな冒涜についてさらに理解を深めたいと思います。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミー・プラブは、数多くの権威ある経典から節を引用し、聖なる名前の御足に対する冒涜に関して巧みに解説しています。『ヴィシュヌ・ヤーマラ・タントラ』でシュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、主の聖なる名前を唱えるだけですべての罪の影響から解放されることを裏づけています。そして『マールカンデーヤ・プラーナ』の言葉を引用し、「主の献愛者に対して不敬なことは言ってはならないし、献愛者をけなしている者たちに耳を貸してはいけない。非難する者の舌を切り落としてそれ以上の非難を許さない。それができなければ、主の献愛者の非難を聞くよりは自殺したほうがいい」と教えています。結論としては、献愛者の非難を聞いてはいけないし、非難することを許してはいけない、と言えます。主の聖なる名前と

半神たちの名前をいっしょくたにしないことについては、啓示経典（BG.10.41）が、「桁外れの力を持つ生命体でも、主クリシュナという至上のエネルギー源の部分体である」と明言しています。主を除き、だれもが主に従属し、だれも主から独立していません。至高主のエネルギーよりも力が強く、あるいは等しい者はいないため、主の名前ほどの力を持つ者もいません。主の聖なる名前を唱えることで、万物の源と一致したエネルギーを手に入れることができます。ですから、主の至高かつ聖なる名前をほかの名前と同じものと考えてはなりません。ブラフマー、シヴァなど、力を持つ他の半神でも、至高主ヴィシュヌと等しくなることはぜったいにありません。主の力みなぎる聖なる名前は、まちがいなく、私たちから罪の反動を取りのぞいて救ってくれますが、聖なる名前という超越的な力を自分の邪悪な活動に使う者は、世界でもっとも堕落した人間と言えるでしょう。そのような輩を主は許しませんし、主のどの代表者たちも許しません。ですから私たちは自分の生涯を、ぜがひでも、冒涜することなく主の栄光の称讃に活用しなくてはなりません。そのような活動は、たとえ一瞬でも、無知のなかで長生きすることとは比較になりません。木のように、精神的な高まりを求めることなく何千年ものあいだ生きる生涯になんの価値があるでしょうか。

第１３節

खट्वाङ्गो नाम राजर्षिर्ज्ञात्वेयत्तामिहायुषः ।
मुहूर्तात्सर्वमुत्सृज्य गतवानभयं हरिम् ॥ १३ ॥

khaṭvāṅgo nāma rājarṣir
jñātveyattām ihāyuṣaḥ
muhūrtāt sarvam utsṛjya
gatavān abhayaṁ harim

khaṭvāṅgaḥ—カトゥヴァーンガ王; *nāma*—名前; *rāja-ṛṣiḥ*—神聖な王; *jñātvā*—知識によって; *iyattām*—寿命; *iha*—この世界で; *āyuṣaḥ*—人生の; *muhūrtāt*—ほんの一瞬で; *sarvam*—すべて; *utsṛjya*—捨てている; *gatavān*—経験した; *abhayam*—完全に安全な; *harim*—人格主神。

神聖な王だったカトゥヴァーンガは、余命いくばくもないことを告げられ、すぐさま物質的活動を捨てて至上の安全・人格主神に身をゆだねた。

要旨解説

不動の責任感を持つ人は、人間としての生涯の義務を意識していなくてはなりません。物質生活の必要性を満たす活動がすべてではないのです。来世で最善の境地に到達できる義務を注意深く実践できるよう、心がけておくべきです。人間生活はその主要な義務をはたすためにあります。この節ではマハーラージャ・カトゥヴァーンガが神聖な王として表現されていますが、それは、国を統治するという責任ある立場にありながら人生の主要な義務を忘れていなかったからです。それはマハーラージャ・ユディシュティラやマハーラージャ・パリークシットのようなラージャルシ（神聖な王）たちにもあてはまります。かれらは、自分の主要な義務を注意深く達成した模範と言える人物たちです。マハーラージャ・カトゥヴァーンガは半神たちに天界に招かれて悪魔たちと戦いましたが、王として、半神たちの満足のために精一杯戦いました。半神たちは王の活躍に心から満足し、物質的な喜びを得る恩恵を授けようとしましたが、カトゥヴァーンガ王はいつも主要な義務を考えていたため、自分に寿命がどれだけ残されているのか尋ねました。来世をどう迎えるべきかを考えていたかれは、半神から物質的な恩恵をもらうつもりはなかったのです。しかしかれは、余命いくばくもないことを知らされます。これを聞いた王は、頂点の物質的楽しみを満喫できる天界を離れてすぐに地球にもどり、完全な安全・人格主神に窮極の庇護を求めました。そしてそのすばらしい試みを完成させ、解放されました。神聖な王によるこの試みは、わずかな時間のなかで首尾よく達成されました。主要な義務を決して忘れていなかったからです。このように、マハーラージャ・パリークシットには、『シュリーマド・バーガヴァタム』という形で主の栄光を聞く主要な義務をたった７日間で遂行しなくてはなりませんでしたが、偉大なシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーから励まされました。マハーラージャ・パリークシットは、主の意志ですぐに偉大なシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーと出会い、こうして、パリークシット王によって残された精神的成功というすばらしい宝物が『シュリーマド・バーガヴァタム』のなかに巧みに述べられることになったのです。

第１４節

तवाप्येतर्हि कौरव्य सप्ताहं जीवितावधिः ।
उपकल्पय तत्सर्वं तावद्यत्साम्परायिकम् ॥ १४ ॥

tavāpy etarhi kauravya
saptāhaṁ jīvitāvadhiḥ
upakalpaya tat sarvaṁ
tāvad yat sāmparāyikam

tava—あなたの; *api*—もまた; *etarhi*—ゆえに; *kauravya*—クルの家系に生まれた者よ; *saptāham*—７日間; *jīvita*—寿命; *avadhiḥ*—〜の制限まで; *upakalpaya*—それらを執行させる; *tat*—それら; *sarvam*—すべて; *tāvat*—長い間; *yat*—〜であるものは; *sāmparāyikam*—来世のための儀式。

マハーラージャ・パリークシットよ。あなたの寿命はあと７日間に限られた。だからそのあいだに、最善の来世を得るための必要な儀式をすべて執行することができる。

要旨解説

シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、わずかのあいだに来世の準備をしたマハーラージャ・カトゥヴァーンガの例について話したあと、これから７日間という、限られてはいても自由に使える時間があるのだから、来世のためにその時間を使うことができる、とマハーラージャ・パリークシットを励ましています。間接的にゴースヴァーミーはマハーラージャ・パリークシットに、残された生涯の７日間に主の音としての権化に身をゆだね、そして解放されるように、と言っているのです。言いかえると、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーがマハーラージャ・パリークシットに話したように、だれでも『シュリーマド・バーガヴァタム』をただ聞くだけで来世のために最善の準備ができる、ということです。儀式は形式的なものではありませんが、ためになる条件もあり、そのことがこれから教えられていきます。

第１５節

अन्तकाले तु पुरुष आगते गतसाध्वसः ।
छिन्द्यादसङ्गशस्त्रेण स्पृहां देहेऽनु ये च तम् ॥ १५ ॥

anta-kāle tu puruṣa
āgate gata-sādhvasaḥ
chindyād asaṅga-śastreṇa
spṛhāṁ dehe 'nu ye ca tam

anta-kāle—生涯最期にあたって; *tu*—しかし; *puruṣaḥ*—人物; *āgate*—到着して; *gata-sādhvasaḥ*—死に対する恐れがまったくない; *chindyāt*—切り落とさなくてはならない; *asaṅga*—無執着; *śastreṇa*—〜と言う武器によって; *spṛhām*—すべての望み; *dehe*—物質的礼拝堂に関連して; *anu*—〜に関連して; *ye*—それらすべて; *ca*—もまた; *tam*—それら。

息を引き取ろうとするまさにそのときでさえ、死を恐れぬほど大胆であれ。しかし同時に、肉体への執着、あるいは肉体にかかわるものすべて、肉体のために望むものすべてに対する執着をすべて断ちきらなくてはならない。

要旨解説

愚鈍な物質主義の愚かさとは、価値ある人間のエネルギーで作られたものすべてをまちがいなく放棄しなくてはならないのに、この世界でいつまでも住みつづけられる、とだれもが考えることにあります。愚かな大政治家、科学者、哲学者たちは、精神魂についてはなにも知らず、数年しかない人生をすべてだと思い、死んだあとはなにも残らない、と考えています。このような貧弱な知識は世界中の博識な人々のなかにでさえ見られ、それが人間の生気を滅ぼし、その恐ろしい結果が世に広がっている様を強く感じることができます。それでも、愚かな物質主義者たちは来世でなにが起こるのか考えようともしない。『バガヴァッド・ギーター』が説く予備的教えは「生命体の個別性は、外側の衣服である体が死に絶えてもなくならない」、という点にあります。服が古くなれば新しいものに換えるように、個々の生命体も体を換え、その交換が死と呼ばれるのです。ですから、死はいまの寿命がつきるときに起こる肉体の変化、と言えます。賢い人はその準備をし、来世で一番すばらしい体を選ばなくてはなりません。その一番の体が精神的体であり、神の国にもどることのできる人、あるいはブラフマンの境地に入ることのできる人が手に入れます。この編の第２章で、この主題がさらに深く論じられますが、体の変化については、いま来世の準備をしなくてはなりません。愚かな人たちは、現世の一時的な生活のことしか頭になく、愚かな指導者も体や体に関係することだけを解決させようとしています。体にかかわること、といってもそれは体だけのことではなく、家族、妻、子ども、社会、国など、その他多くの物事も含まれ、そのすべてが命の終わりとともになくなります。死んだあと、体にかかわることもすべて忘れさられます。これは夜眠っているときにだれもが経験しています。眠っているあいだは、数時間ではあっても、体のこと、体に関係することすべてを忘れています。死とは、次の体という束縛期間に入るまえの数ヶ月の睡眠、と言えます。どのような束縛かは、各自の望みに応じて自然界の法則が与えます。ですから、いまの体を持っているときに望みを変えるべきであり、だからこそ生きているうちに訓練を受けなくてはなりません。その訓練はいつでも、死ぬ数秒前でも始められますが、一般的には人生の初期から訓練を受け、ブラフマチャリャ、そしてグリハスタ、ヴァーナプラスタ、サンニャーサと徐々に高められていきます。その訓練を可能にする制度がヴァルナーシュラマ・ダルマ、またはサナータナ・ダルマという人間生活を完璧にする最善の方法です。ですから、家族、社会、政治

中心の生活は、５０歳になったら、あるいはそれ以前にできなければ、捨てなくてはなりません。それができれば、次のヴァーナプラスタとサンニャーサ・アーシュラマで来世の準備のための訓練が始まります。「一般大衆の指導者」という衣服をまとった愚かな物質主義者は、自分にかかわる物事への執着を捨てずに、家族に執着しています。かれらは、人生の終わりに大衆から尊敬されるかもしれませんが、だからといって、だれもの手足をがんじがらめに縛っている自然界の法則から逃れられるわけでもありません。ですから、自分からすすんで家族や国にまつわる執着を主への献愛奉仕に移すことが最善策なのです。この節では、家族への執着という望みをすべて捨てることが勧められています。優れた望みを得る機会をつかむべきであり、それができなければ、病的な望みを捨てる機会はやってきません。望みは生命体に本来そなわっています。生命体は永遠ですから、その自然なその望みも永遠です。望まなくなることはできません、しかし、望むものを変えることはできます。ですから、ふるさとに、神のもとに帰ろうとする望みこそ高めなくてはなりませんし、そうすれば物質的な利益、物質的な名声、物質的な人望などを得ようとする思いは、献愛奉仕の高まりに応じてなくなっていきます。生命体の本質は奉仕であり、生命体がいだく望みはその奉仕活動に向けられています。政府の最高幹部から路傍の貧者まで、だれかになにかの奉仕をしています。その奉仕の精神は、奉仕の望みを物質的なものから精神的なもの、すなわち悪魔から神に移すことで完成するのです。

第１６節

गृहात् प्रव्रजितो धीरः पुण्यतीर्थजलाप्लुतः ।
शुचौ विविक्त आसीनो विधिवत्कल्पितासने ॥ १६ ॥

gṛhāt pravrajito dhīraḥ
puṇya-tīrtha-jalāplutaḥ
śucau vivikta āsīno
vidhivat kalpitāsane

gṛhāt—自宅から; *pravrajitaḥ*—出ていって; *dhīraḥ*—自己制御; *puṇya*—敬虔な; *tīrtha*—神聖な場所; *jala-āplutaḥ*—充分に洗って; *śucau*—清められて; *vivikte*—人里離れた; *āsīnaḥ*—座って; *vidhivat*—規則に従っている; *kalpita*—〜をして; *āsane*—座る場所に。

家を離れ、自己を抑制する修行に励まなくてはならない。神聖な場所に住み、定期的に沐浴し、充分に浄化された、そしてだれもいない場所に座るのである。

要旨解説

よりよい来世を得るために、私たちは快適な我が家から出ていかなくてはなりません。ヴァルナーシュラマ・ダルマ、あるいはサナータナ・ダルマのシステムは、50歳をすぎたら、できるだけ早く家族とのつながりから離れることを定めています。現代文化の基準は、最高の生活環境に支えられた家庭で快適に住むことにあり、退職した人たちは、美しい女性や子どもで飾られ、すべてが整えられた家で快適に余生をすごすつもりでいますし、まして快適な家庭を放棄する望みはまったくありません。政府の高級官僚や大臣は死ぬまで名誉ある地位にしがみつき、家庭の慰安を放棄することを望みも夢見ることもしません。そのような妄想にとりつかれた物質主義者たちは、もっと快適な生活を求めてさまざまな計画をたてますが、突然現われた残酷な死に情け容赦なく襲われ、望みに反して、壮大な計画作成者は連れ去られ、いまの体から次の体に強引に入れられます。そして、過去の活動に応じた結果にもとづいて840種類の体の一つに押しこめられます。家庭の慰安にあまりにも執着している人々は、罪なことをしていた生活のために、ふつう、来世で下等な生物に生まれ、こうして人間生活のエネルギーは無駄に使われてしまいます。人間生活を無駄にする危険を冒さないためにも、50歳になったら、あるいはその歳になるまえでも、死の警告を受けいれなくてはなりません。たいせつなことは、50歳になるまえであろうと、自分が死ぬという警告はすでに発せられているのですから、何歳であろうと、よりよい来世のために準備をする心構えです。サナータナ・ダルマ制度に従う人々は、人としての生活を無駄にしないよう、よりよい来世のために訓練を受けます。全世界にある聖地は、そのような来世の準備ができるように、退職した人々の居住地として用意されています。知性ある人々は、人生最期のときが近づいたら、できれば50歳になったら聖地に行くべきであり、物質生活の足かせである家族への執着から解放されるために、精神的に生まれ変わる生活をしなくはなりません。物質的な執着を断ち切るためだけに家庭を放棄することが勧められていますが、それは、死ぬまで家族生活にしがみついている人は物質的な執着を断ちきることはできないし、物質に執着していれば精神的自由の意味も理解できないからです。しかし、ただ家を出たとしても、合法でも違法でも、聖地に別の家庭をかまえて満足することがあってはなりません。出家して聖地に行く人たちはたくさんいますが、望ましくないつきあいのために、あるいは異性との不義な関係に陥ってふたたび家族を作ったりします。物質の幻想エネルギーはひじょうに強く、幸せだった家庭を捨てた人でも、ふたたびそのような幻想を選んでしまうことがよくあります。ですから、性的な望みをいっさい持たずに独身生活をし、自己抑制を修練しなくてはなりません。自分の存在を改善したい人にとって、性的なことにかかわることは自殺行為、あるいはそれよりもいまわしい行為とされています。ですから、家庭生活を捨

てるということは、すべての感覚の望み、とくに性的な望みを抑える人間になる、ということでもあります。その方法は、充分に浄化された場所に行き、ワラ、鹿皮、じゅうたんなどに座り、先に説明されたように冒涜することなく主の聖なる名前を唱えることです。心を物質的な物事から逸らし主の蓮華の御足に集中させること――このかんたんな方法が、私たちを助け、精神的な成功という最高段階にまで導いてくれるのです。

第１７節

अभ्यसेन्मनसा शुद्धं त्रिवृद्ब्रह्माक्षरं परम् ।
मनो यच्छेज्जितश्वासो ब्रह्मबीजमविस्मरन् ॥ १७ ॥

abhyasen manasā śuddhaṁ
trivṛd-brahmākṣaraṁ param
mano yacchej jita-śvāso
brahma-bījam avismaran

abhyaset—修練しなくてはならない; *manasā*—心によって; *śuddham*—神聖な; *tri-vṛt*—３つで構成されて; *brahma-akṣaram*—超越的な文字; *param*—至高者; *manaḥ*—心; *yacchet*—支配下に置く; *jita-śvāsaḥ*—呼吸の空気を制御することで; *brahma*—絶対的な; *bījam*—種; *avismaran*—忘れ去られることなく。

このように座ったあと、心を使って３つの超越的な文字（a-u-m）を思いだし、呼吸を制御しながら、心がこの超越的な種を忘れないよう励みなさい。

要旨解説

オームカーラ（*Oṁkāra*）、あるいはプラナヴァ（*praṇava*）は、超越的な悟りの種であり、３つの超越的な音、*a-u-m*（ア－ウ－ム）で構成されています。トランスに導く超越的かつ機械的な唱名法であり、また偉大な神秘家たちの経験で工夫された呼吸法と合わせて心でこの音を唱えることで、物質的な考えに没頭している心を抑制することができます。これが、心の習慣を変える方法です。心を殺してしまうわけではありません。心や望みは止めることはできませんが、精神的悟りのために望みを強めることはでき、また、心を使う対象の質を変えなくてはなりません。心は活動する感覚器官の中心になっていますから、考えること・感じること・望むことの質が変われば、自然に、道具としての感覚の質も変わります。オームカーラ（*oṁkāra*）

はすべての超越的な音の種であり、心と感覚に望ましい変化をもたらします。心理的に異常な人でさえ、この超越的な音によって治療することができます。『バガヴァッド・ギーター』では、プラナヴァ（オームカーラ）が最高絶対真理社の直接の、そして文字の表われ、として受けいれられています。主の聖なる名前をそのまま唱えられない人は、すでに勧められているように、プラナヴァ（オームカーラ）をかんたんに唱えることができます。オームカーラは、神に向かって呼びかける言葉、たとえば「おお、我が主よ」という意味で、*oṁ hari om*（オーム・ハリ・オーム）が「おお主よ、最高人格主神よ」という意味であるのと同じです。先に説明したように、主の聖なる名前と主自身は同じです。オームカーラもしかり。しかし、不完全な感覚のために主の超越的な個人としての姿や名前が理解できない人（つまり、初心者）は、呼吸を制御し、同時に心のなかでプラナヴァ（オームカーラ）を繰りかえし唱える修練をしながら訓練することができます。これまでなんども説明しましたが、人格主神の超越的な名前、姿、特質、娯楽などは物質的な感覚ではぜったいに理解できないため、感覚の活動の中心である心をとおして、そのような超越的な悟りが理解できるようになります。献愛者は心を絶対真理の人物に集中させます。しかし、絶対者の個人としての様相に適応できない人は、さらに心を高い境地に導くためにも非人格性をとおして高められるために訓練されます。

第１８節

नियच्छेद्विषयेभ्योऽक्षान्मनसा बुद्धिसारथिः ।
मनः कर्मभिराक्षिप्तं शुभार्थे धारयेद्धिया ॥ १८ ॥

niyacched viṣayebhyo 'kṣān
manasā buddhi-sārathiḥ
manaḥ karmabhir ākṣiptaṁ
śubhārthe dhārayed dhiyā

niyacchet—引き込める; *viṣayebhyaḥ*—感覚的従事から; *akṣān*—感覚; *manasā*—心の力で; *buddhi*—知性; *sārathiḥ*—操縦者; *manaḥ*—心; *karmabhiḥ*—果報的活動によって; *ākṣiptam*—〜に没頭して; *śubha-arthe*—主のために; *dhārayet*—耐える; *dhiyā*—完全な意識の中で。

心を感覚的活動から逸らすことでしだいに心が精神化し、そして知性によって感覚は抑制できるようになる。物質的な活動に強く没頭していた心も、人格主神への奉仕に使うことができるようになり、完全な超越的意識に固定されていく。

要旨解説

プラナヴァ（オームカーラ）を機械的に唱え、呼吸を制御することで心を精神化させる最初の方法は、とくににプラーナーヤーマの神秘的あるいはヨーガ方法、すなわち呼吸気の完全制御法と呼ばれています。このプラーナーヤーマの最終段階は、法悦境、専門的にサマーディと呼ばれる境地に固定されることにあります。しかしこれまでの歴史では、サマーディの境地にいた聖者でさえ、物質的なことに没頭した心を抑えられなかった事例があります。たとえば、ヴィシュヴァーミトゥラ・ムニはサマーディにいましたが、感覚の犠牲になってメーナカーと結ばれました。これは歴史に記録されている事実です。心は、いまは感覚的なことを考えることをやめていても、潜在意識の状態で過去の感覚的活動を覚えており、自己の悟りに完全に専念しようとする修練者を乱します。ですから、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは次の方法、すなわち、心を人格主神への奉仕に固定させる方法を勧めています。主シュリー・クリシュナ、人格主神は『バガヴァッド・ギーター』（第６章・第47節）でもこの直接の方法を勧めています。こうして心は精神的に洗い清められたあと、聞く、唱えるというさまざまな献愛奉仕の活動をとおして主への超越的な愛情奉仕に励まなくてはなりません。正しく導かれて実践すれば、乱された心にとっても、高められるもっとも確かな方法です。

第１９節

तत्रैकावयवं ध्यायेदव्युच्छिन्नेन चेतसा ।
मनो निर्विषयं युक्त्वा ततः किञ्चन न स्मरेत् ।
पदं तत्परमं विष्णोर्मनो यत्र प्रसीदति ॥ १९ ॥

tatraikāvayavaṁ dhyāyed
avyucchinnena cetasā
mano nirviṣayaṁ yuktvā
tataḥ kiñcana na smaret
padaṁ tat paramaṁ viṣṇor
mano yatra prasīdati

tatra—その後; *eka*—１つずつ; *avayavam*—体の手足; *dhyāyet*—～に集中させるべきである; *avyucchinnena*—完全な姿から心を逸らせることなく; *cetasā*—心によって; *manaḥ*—心; *nirviṣayam*—感覚の対象物に穢されることなく; *yuktvā*—適応されて; *tataḥ*—その後; *kiñcana*—

なんでも; *na*—〜しない; *smaret*—〜のことを考える; *padam*—人物; *tat*—その; *paramam*—至高者; *viṣṇoḥ*—ヴィシュヌの; *manaḥ*—心; *yatra*—〜すると; *prasīdati*—調和する。

そのあと、体全体という実像から逸らすことなく、ヴィシュヌの手足を順に瞑想しなくてはならない。こうして、心はすべての感覚の対象物から解放される。それ以外に考えるものがあってはならない。最高人格主神・ヴィシュヌは窮極の真理だからこそ、心は主のなかでこそ完全に調和するようになる。

要旨解説

愚かな人々はヴィシュヌの外的エネルギーに惑わされているため、幸福をめざして歩みつづけるその窮極目標は主ヴィシュヌ、人格主神との絆の確立にあることを知りません。ヴィシュヌ・タットヴァ（*Viṣṇu-tattva*）は、人格主神のさまざまな超越的姿の無限の拡張体であり、そのヴィシュヌ・タットヴァの至高かつ根源の姿はゴーヴィンダ、主クリシュナ、すなわちすべての原因の窮極原因です。ですから、ヴィシュヌのことを考えること、あるいはヴィシュヌ、とくに主クリシュナの超越的な姿を瞑想することは、瞑想の最終目標です。この瞑想は、主の蓮華の御足から始めることができます。しかし、主の体全体のことを忘れたり、まちがって導かれたりしてはなりません。主の超越的な体の各部分を考える練習をすべきです。この節では、至高主は非人格ではない、と断言されています。主は人物です、しかし、その体は私たちのような条件づけられた人々の体とは違います。そうでなければ、プラナヴァ（オームカーラ）から始まってヴィシュヌの個人としての体の手足にいたる瞑想が、完全な精神的完成を到達する手段としてシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーから勧められなかったはずです。ですから、インドにあるヴィシュヌを崇拝するための大寺院は、貧弱な知識しかない人たちがまちがって解釈するような偶像崇拝のための場所ではありません。そうではなく、ヴィシュヌの超越的な体の手足を瞑想するための精神的中心点なのです。ヴィシュヌ寺院に据えつけられている崇拝に値する神像は、主ヴィシュヌの人智を絶する力ゆえに、主とまったく同じです。ですから、寺院にあるヴィシュヌの手足に初心者が心を集中させる、あるいは瞑想することは、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーという偉大な権威者が勧めているように、１箇所にしっかり座ってヴィシュヌの体の手足に心を集中させ、つぎにプラナヴァ・オームカーラに集中できない人々にはかんたんな瞑想の機会になります。一般の人には、寺院でヴィシュヌの姿を瞑想するのは、先に説明したように、*a-u-m*（ア・ウ・ム）で構成された精神的結合であるオームカーラを唱えるよりも、もっと恩恵があります。オームカーラとヴィシュヌの姿に変わりはありません、しかし絶対真理者の科学をよく知らない人々は、ヴィシュヌの姿とオームカーラの姿を別々の

ものと見ることで相反する要素を作りだそうとしています。この節では、ヴィシュヌの姿こそ瞑想の窮極目標であり、だからこそ、姿も形もないオームカーラを唱えるよりヴィシュヌの姿を瞑想するほうが優れている、と言われています。修練者にとって、前者の方法は後者よりも難しいと言えるのです。

第２０節

रजस्तमोभ्यामाक्षिप्तं विमूढं मन आत्मनः ।
यच्छेद्धारणया धीरो हन्ति या तत्कृतं मलम् ॥ २० ॥

rajas-tamobhyām ākṣiptaṁ
vimūḍhaṁ mana ātmanaḥ
yacched dhāraṇayā dhīro
hanti yā tat-kṛtaṁ malam

rajaḥ—物質自然界の激情の様式; *tamobhyām*—そして物質界の無知の様式によって; *ākṣiptam*—刺激されて; *vimūḍham*—混乱させられて; *manaḥ*—心; *ātmanaḥ*—自分自身の; *yacchet*—それを矯正させる; *dhāraṇayā*—（ヴィシュヌの）考えによって; *dhīraḥ*—宥められた者; *hanti*—破壊する; *yā*—それらすべて; *tat-kṛtam*—それらによって為されて; *malam*—汚い物事。

人の心は、物質自然界の激情の様式にたえず刺激され、無知の様式のために混乱している。しかし、ヴィシュヌとの絆を築くことでそのような傾向を改善することができ、様式が作りだした穢れを清めれば、心を落ち着かせることができる。

要旨解説

激情と無知の様式によって動かされている人は、神を悟る超越的な境地に到達できるほんとうの候補者にはなれません。徳の様式にいる人だけが、至高の真理の知識を得ることができます。激情と無知の様式の影響は、富と女性に対する強い欲望となって現われます。そして富と女性を求めすぎている人々は、主ヴィシュヌの潜在的な力である非人格的様相を思いつづけることで矯正されます。一般的に、非人格論者や一元論者は激情と無知の様式に惑わされています。非人格論者は自分を解放された魂だと思っていますが、絶対真理の「超越的な人物」としての様相を知りません。じつは、絶対者の人物の様相を知らないため、かれらの心は不純です。『バガヴァッド・ギーター』では、「非人格論哲学者は、何百回もの誕生を経たあとに、人格

主神に身をゆだねるようになる」と言われています。初心の非人格論者が神の人物としての様相を悟れるように、すべてが主と関係していることを汎神論の哲学をとおして悟る機会が与えられています。

汎神論のなかでもより高い段階では、絶対真理の姿のない様相を認めていませんが、絶対真理の概念を、いわゆる物質エネルギーという分野まで拡大させています。物質エネルギーによって作られた万物は、生命体の本質である「奉仕の態度」をとおして絶対者と合致させることができます。主の純粋な献愛者は、奉仕の態度をとおしてすべてを精神的に変える方法を知っており、その献愛奉仕と合致することで汎神論は完璧なものになります。

第２１節

यस्यां सन्धार्यमाणायां योगिनो भक्तिलक्षणः ।
आशु सम्पद्यते योग आश्रयं भद्रमीक्षतः ॥ २१ ॥

yasyāṁ sandhāryamāṇāyāṁ
yogino bhakti-lakṣaṇaḥ
āśu sampadyate yoga
āśrayaṁ bhadram īkṣataḥ

yasyām—そのように規則的に思い出す方法によって; *sandhāryamāṇāyām*—そして、その習慣に立脚することで; *yoginaḥ*—神秘家達; *bhakti-lakṣaṇaḥ*—献愛奉仕の方法を修練して; *āśu*—すぐに; *sampadyate*—成功する; *yogaḥ*—献愛奉仕との関連; *āśrayam*—〜の庇護下で; *bhadram*—すべてにおいて善なる者; *īkṣataḥ*—それを見ているもの。

王よ。思いつづけるというこの方法で、そしてあらゆる面で善なる主を見る習慣に立脚し、そして主の直接の庇護下ですぐさま主への献愛奉仕の境地に到達する。

要旨解説

神秘的修練の成功は、献愛奉仕の態度という助けがあってこそ実現します。汎神論、すなわち全能者があらゆる場所に遍在することを感じる理論は、ある意味では、心を献愛奉仕の考え方に慣れさせることでもあり、神秘主義者が神秘的修行を最後に成功させられるのは、まさにこの献愛奉仕的態度なのです。しかし、じっさいに献愛奉仕をしなければ成功をおさめることはできません。汎神論的考えをとおした献愛奉仕のきもちは、やがてち献愛奉仕に高まってい

き、その点が非人格論者にとって唯一の恩恵と言えます。『バガヴァッド・ギーター』（第12章・第５節）では、非人格的な方法で自己を悟るのはじつにやっかいなもの、と断言されています。長い歳月のあと、非人格論者も主の人物の様相に没頭するようにはなるのですが、それは間接的な道をとおって目的地に辿りつく方法だからです。

第２２節

राजोवाच
यथा सन्धार्यते ब्रह्मन् धारणा यत्र सम्मता ।
यादृशी वा हरेदाशु पुरुषस्य मनोमलम् ॥ २२ ॥

rājovāca
yathā sandhāryate brahman
dhāraṇā yatra sammatā
yādṛśī vā hared āśu
puruṣasya mano-malam

rājā uvāca—幸運な王が言った; *yathā*—ありのままに; *sandhāryate*—考えが築かれる; *brahman*—おおブラーフマナよ; *dhāraṇā*—考え; *yatra*—どこに、どのように; *sammatā*—要約して; *yādṛśī*—〜による方法; *vā*—あるいは; *haret*—救われて; *āśu*—速やかに; *puruṣasya*—人の; *manaḥ*—心の; *malam*—汚れた物事。

幸運なパリークシット王がさらに尋ねた。「おおブラーフマナよ。どうか詳しくご説明ください。心をどのように、どこに向けたらいいのでしょうか。そして、心のなかにある汚れたものごとが取り除けるようにするには、どのように意識を固定させたらいいのでしょうか」

要旨解説

条件づけられた魂の心にある汚れた思いは、当人にはあらゆる困難の根源です。条件づけられた魂は、物質存在でさまざまな苦しみに囲まれていますが、深い無知のために、そして物質界で長く投獄された生活をつづけてきたあいだに、心にためられた汚れたものごとである困難を取りのぞくことができません。もともと至高主の意思に仕える立場にあるのに、心の汚れのために自分勝手な望みに仕えようとしています。この望みは、心に平安を与えるどころか、新しい問題を作りだし、その結果、誕生と死のサイクルに私たちを縛りつけるのです。果報的活

動と経験主義哲学というこの汚れたものごとは、至高主とのふれあいでしか取りのぞけません。主は全能の方ですから、人智を絶する力をとおして私たちにそのふれあいの機会を授けてくれます。こうして、絶対者の人物の様相に信念を固定させられない人々は、ヴィラートゥ・ルーパ（*virāṭ-rūpa*）「主の宇宙に広がる非人格的様相」とふれあう機会が与えられます。主の宇宙的非人格的様相は、主の無限の力の表われです。力と力の源は同じですから、その宇宙的非人格的様相であっても、条件づけられた魂が主と間接的にふれあう助けになり、そして徐々に人物として接触する段階に高められていきます。

マハーラージャ・パリークシットはすでに主シュリー・クリシュナの人物としての様相にじかに結ばれていますから、心をどこに、どうやって主のヴィラートゥ・ルーパと適応させる尋ねる必要はありませんでした。しかし、主の永遠と知識と喜びにあふれた姿である超越的な人物の様相が考えられない人たちのために、詳しく説明してくれるよう求めました。献愛者でない人々は、主が人物であることを考えられません。貧弱な知識しかないために、ラーマやクリシュナのような主の人物としての姿は、かれらには不快なものでしかありません。主の力を貧弱な知識でしか評価しかできないのです。『バガヴァッド・ギーター』（第９章・第11節）では主みずから、貧弱な知識しかないかれらは、主を凡人と考え、主の至高の人格性を嘲笑する、と言っています。かれらは主の人智を絶する力を知りません。主はその力を使って、人間社会で、あるいはその他もろもろの生物の社会で活動することができ、同時に、超越的な立場から少しも逸れることなく全能の主としてとどまることができます。ですから、主の人物としての永遠な姿を受けいれられない人々のために、マハーラージャ・パリークシットは、まず心を主に固定させる方法についてシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーに尋ねました。そしてゴースヴァーミーは次のように詳しく説明していきます。

第２３節

श्रीशुक उवाच

जितासनो जितश्वासो जितसङ्गो जितेन्द्रियः ।
स्थूले भगवतो रूपे मनः सन्धारयेद्धिया ॥ २३ ॥

śrī-śuka uvāca
jitāsano jita-śvāso
jita-saṅgo jitendriyaḥ
sthūle bhagavato rūpe
manaḥ sandhārayed dhiyā

śrī-śukaḥ uvāca—シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが言った; *jita-āsanaḥ*—座位を制御する; *jita-śvāsaḥ*—制御された呼吸法; *jita-saṅgaḥ*—制御された連想; *jita-indriyaḥ*—制御された感覚; *sthūle*—濃密な物質の中に; *bhagavataḥ*—人格主神に; *rūpe*—～の様相の中に; *manaḥ*—心; *sandhārayet*—専念しなくてはならない; *dhiyā*—知性によって。

シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが答えた。「座る姿勢を制御し、プラーナーヤーマ・ヨーガで呼吸を制御し、心と感覚を抑制し、さらに知性を使って心を主の濃密な力（ヴィラートゥ・ルーパ）に集中させなくてはならない」

要旨解説

物質と深くかかわっている条件づけられた魂の心は、魂が肉体観念という限界を超えることを許しません。そのため、瞑想のヨーガ法（座位と呼吸を制御し、心を至高者に固定させること）は、愚鈍な物質主義者の性質を整えるために定められています。物質主義者が物質に没頭している心を清めなければ、超越的存在に思いを集中させることはできません。集中できるようになるために、心を濃密な物質、あるいは主の外的様相に固定させることができます。次の節では、主の強大な姿の各部分について説明されています。物質的な人々は、そのような抑制方法に従って神秘的な力を得たいと強く願っていますが、ヨーガの制御は心に積もった汚れ、欲情、怒り、貪欲など、物質的な穢れを根絶することにあります。神秘主義のヨーギーが、神秘的な制御に心が向いて横道に逸れてしまえば、ヨーガの成功を達成する使命は失敗します。最終的な目的は神の悟りだからです。そうならないように、さまざまな考えで心を固定させることが勧められており、結果として、主の力を悟ることができます。さまざまな力が超越的存在・神の道具として表われていることに気づいた人は、次の段階に進むことができ、そして徐々に、完全な悟りを得る可能性が開けてきます。

第２４節

विशेषस्तस्य देहोऽयं स्थविष्ठश्च स्थवीयसाम् ।
यत्रेदं व्यज्यते विश्वं भूतं भव्यं भवच्च सत् ॥ २४ ॥

viśeṣas tasya deho 'yaṁ
sthaviṣṭhaś ca sthavīyasām
yatredaṁ vyajyate viśvaṁ
bhūtaṁ bhavyaṁ bhavac ca sat

viśeṣaḥ—個人の; *tasya*—主の; *dehaḥ*—体; *ayam*—この; *sthaviṣṭhaḥ*—濃密な物質; *ca*—そして; *sthavīyasām*—全物質の; *yatra*—その中で; *idam*—これらすべての現象界; *vyajyate*—経験される; *viśvam*—宇宙; *bhūtam*—過去; *bhavyam*—未来; *bhavat*—現在; *ca*—そして; *sat*—結果としての。

１つの全体としての物質現象界であるこの巨大な表われは、絶対真理者の人物としての体であり、そのなかで、普遍的結果である物質的時、すなわち過去・現在・未来が体験される。

要旨解説

物質・精神どちらでも、どのようなものでも、それは最高人格主神のエネルギーの拡張体であり、そのことは『バガヴァッド・ギーター』（第13章・第13節）で、全能の主は超越的な目、頭、その他体の部分すべてをあらゆる場所にちりばめている、と述べられています。主はどこにいても、なんでも見たり聞いたり触れたり、あるいは表わすことができます。絶対的世界にある自分の住居にいても、極小の魂たちすべての至高の魂として遍在しているからです。相対的な世界にしても、主の超越的なエネルギーの拡張だからこそ主の現象世界の表われです。主は自分の住居に住んでいますが、主のエネルギーはあらゆる場所に広がっており、それは太陽が１カ所にいながらあらゆる場所に広がっているようなものです。太陽光線は太陽そのものと同じであり、それが太陽の拡張体として解釈されるからです。『ヴィシュヌ・プラーナ』（第１編・第22章・第52節）では、火が１カ所から光と熱を拡散させているように、至高の精神魂、人格主神は自分の無数のエネルギーをあらゆる場所に拡散させている、と述べられています。巨大な宇宙という現象世界は、主のヴィラートゥ体の一部にすぎません。知性の足らない人たちは、主の超越的であらゆる面で精神的な姿を考えることができませんが、未開の原住民が稲妻、巨大な山や菩提樹などに圧倒されるように、主のさまざまなエネルギーに驚かされています。原住民は、虎や象がそなえるすばらしい力を讃えます。アスラたちは、主がいることをどうしても認識できません。啓示経典には主にまつわる説明が鮮やかに述べられていても、また主みずから化身となって現われたり、非凡な力やエネルギーを示したり、ヴャーサデーヴァ、ナーラダ、アシタ、デーヴァラという博識や学者たちに最高人格主神として認められ、『バガヴァッド・ギーター』でアルジュナによって認められ、そして現代ではシャンカラ、ラーマーヌジャ、マドゥヴァ、シュリー・チャイタンニャのようなアーチャーリャによって認められているのに、その説明を認めることができないのです。啓示経典が示す証拠も受けいれないし、偉大なアーチャーリャたちを認めることもしません。じかに自分の目で見たいと思っているのです。ですから、かれらの挑戦に答えられるヴィラートゥという主の強大な体ならかれらも見ることができますし、また虎、象、稲妻など、優れた物質的な力の表われに対しては称讃する

習慣がありますから、ヴィラートゥ・ルーパに敬意を払うことができます。主クリシュナはアルジュナに頼まれて、アスラたちのためにヴィラートゥ・ルーパを示しました。純粋な献愛者は、主の通俗な巨大な姿を見慣れていないため、特別の視野を授かって見なくてはなりません。ですから主は、ヴィラートゥ・ルーパが見られる特別の視力をアルジュナに授け、そのことは『バガヴァッド・ギーター』の第11章で説明されています。主のヴィラートゥ・ルーパの姿がとくに示されたのはアルジュナのためではなく、だれかれかまわず化身と考えて大衆をまちがって導く知性の足らない人々のためでした。かれらは、「私は化身だ」と言う安っぽい人間に向かって、ヴィラートゥ・ルーパが見せられるか、見せられるのであれば化身として受けいれよう、と挑戦しなくてはならないのです。主のヴィラートゥ・ルーパの表われは無神論者への挑戦であると同時に、アスラたちへの恩寵でもあります。かれらは、主をヴィラートゥとして考えることで心から汚いものごとを洗いながし、近い将来、主の超越的な姿をほんとうに見られる資格を手に入れられます。これが、無神論者や愚鈍な物質主義者たちに対するあらゆる面で慈悲深い主の恩寵なのです。

第２５節

अण्डकोशे शरीरेऽस्मिन् सप्तावरणसंयुते ।
वैराजः पुरुषो योऽसौ भगवान् धारणाश्रयः ॥ २५ ॥

aṇḍa-kośe śarīre 'smin
saptāvaraṇa-saṁyute
vairājaḥ puruṣo yo 'sau
bhagavān dhāraṇāśrayaḥ

aṇḍa-kośe—宇宙の殻の中で; *śarīre*—〜の体内で; *asmin*—この; *sapta*—7重; *āvaraṇa*—覆い; *saṁyute*—そのように為されて; *vairājaḥ*—巨大な宇宙の; *puruṣaḥ*—主の姿; *yaḥ*—それ; *asau*—主; *bhagavān*—人格主神; *dhāraṇā*—概念; *āśrayaḥ*—〜の対象。

７重の物質要素で覆われた宇宙の殻のなかに示された人格主神の巨大な宇宙体は、ヴィラートゥ概念の対象である。

要旨解説

主は同時に無数のほかの体を持ち、そのすべてが主の根源の姿・シュリー・クリシュナと同

じです。『バガヴァッド・ギーター』では、主の根源かつ超越的な、そして永遠な姿はシュリー・クリシュナ、絶対人格主神であると確証されていますが、主は人智を絶する内的力・アートマ・マーヤー（*ātma-māyā*）を使って、みずからを無数の姿と化身に同時に拡張させることができ、またそうすることで自分の力を衰えさせることはありません。主は完璧な方であり、主から無数の完全な姿が放出されても、なにも失わずに、完全なままで存在しています。『バガヴァッド・ギーター』の第11章では、人格主神・主クリシュナが、あたかもふつうの人間にように降誕した主を見ることのできない知性に欠ける人々を納得させるためにヴィラートゥ・ルーパを示し、だれも競うことも凌ぐこともできない最高絶対人物であるという主張を証明しています。物質主義的な人々は、不完全ながらも、太陽に匹敵する無数の惑星を含む巨大な宇宙空間を頭で考えることができます。しかしかれらが見られるのは頭上に円形に広がる空だけで、ほかにも何百万何千万もの宇宙があり、各宇宙が空気の入った巨大なフットボールの形をし、水・火・空気・空間・自我・知的概念・物質自然でできた７層の物質の殻で包まれ、主がマハー・ヴィシュヌとして浮かんでいる原因の海に漂っているという宇宙の情報など、まったく知りません。種としての全宇宙は、主の分身マハー・ヴィシュヌの呼吸から放出され、ブラフマーたちが住んでいる各宇宙はすべて、マハー・ヴィシュヌが息を吸うときに消滅します。このようにして物質自然界は主の至高の意志で作られ、そして消されています。この情報を知れば、哀れで愚かな物質主義者たちも自分がどれほど無知なことを言っているのか想像できます。死にかけている人間の主張に耳を貸して、ちっぽけな生き物を主と競いあえる化身と言っているのですから。ヴィラートゥ・ルーパはとくに主によって示されましたが、それは愚かな人間たちに教訓を与えるためであり、主クリシュナが見せたようにヴィラートゥ・ルーパをじっさいに示すことができるのであれば、その人間を神の化身として受けいれることができます。物質主義的な人は自分の心を、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが勧めたように自分の興味を満たすために主のヴィラートゥ・巨大な姿に集中させることはできますが、自分を主クリシュナと同じだと言い張っても主のように行動できず、また宇宙全体を含むヴィラートゥ・ルーパを見せられもしない詐欺師にまちがって導かれないよう、自分を守らなくてはなりません。

第２６節

पातालमेतस्य हि पादमूलं
　　पठन्ति पार्ष्णिप्रपदे रसातलम् ।
महातलं विश्वसृजोऽथ गुल्फौ
　　तलातलं वै पुरुषस्य जङ्घे ॥ २६ ॥

pātālam etasya hi pāda-mūlaṁ
paṭhanti pārṣṇi-prapade rasātalam
mahātalaṁ viśva-sṛjo 'tha gulphau
talātalaṁ vai puruṣasya jaṅghe

pātālam—宇宙の底にある惑星; *etasya*—主の; *hi*—確かに; *pāda-mūlam*—足の裏; *paṭhanti*—彼らはそれを研究する; *pārṣṇi*—かかと; *prapade*—つま先; *rasātalam*—ラサータラという名の惑星; *mahātalam*—マハータラという名の惑星; *viśva-sṛjaḥ*—宇宙の創造者の; *atha*—そのように; *gulphau*—足首; *talātalam*—タラータラという名の惑星; *vai*—それらのとおりに; *puruṣasya*—巨大な人物の; *jaṅghe*—すね。

それを悟った者たちは、パーターラという名の惑星が宇宙体の主の御足の底を構成し、かかととつま先はラサータラという名の惑星であることを学んだ。そして足首がマハータラ惑星、すねがタラータラ惑星を構成していることを学んだ。

要旨解説

最高人格主神の体として表われた宇宙存在は真実ではありません。現象界にあるものはすべて、『バガヴァッド・ギーター』（第９章・第４節）で確証されているように主に支えられていますが、物質主義者が見るものすべてが最高人格主神であると考えるのはまちがっています。物質主義者は、主の宇宙体をとおして至高主の存在を考えることができますが、世界を支配しようとするかれらの考え方は神の悟りではありません。物質資源を勝手に使おうとする物質的見方は、主の外的エネルギーの幻想が原因であり、そのため、主の宇宙体を見て最高真理を悟ろうとする人は、仕えようとする心構えも必要です。その心構えをよみがえらせずにヴィラートゥの姿を見ても効果はありません。超越的な主の姿はどれをとっても、物質創造界の一部ではありません。どのような状況下でも至高の魂としての正体を保ち、決して三様式に影響されません。物質界にあるものすべてが穢れているからです。主はいつでも内的エネルギーをとおして存在しています。

宇宙は14天体系に分けられます。７天体系、すなわち低い順からブール、ブヴァル、スヴァル、マハル、ジャナス、タパス、サッテャは上位の天体系です。低位の天体系として、高い順からアタラ、ヴィタラ、スタラ、タラータラ、マハータラ、ラサータラ、パーターラがあります。この節では、低い順から説明が始まります。主の体の説明はその御足から始まるという献愛奉仕の決まりがあるからです。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは主の献愛者として認め

られている人物であり、その説明にまちがいはありません。

第２７節

द्वे जानुनी सुतलं विश्वमूर्ते-
ऽरुद्वयं वितलं चातलं च ।
महीतलं तज्जघनं महीपते
नभस्तलं नाभिसरो गृणन्ति ॥ २७ ॥

dve jānunī sutalaṁ viśva-mūrter
ūru-dvayaṁ vitalaṁ cātalaṁ ca
mahītalaṁ taj-jaghanaṁ mahīpate
nabhastalaṁ nābhi-saro gṛṇanti

dve—２つ; *jānunī*—２つの膝; *sutalam*—スタラという名の天体系; *viśva-mūrteḥ*—宇宙体の; *ūru-dvayam*—２本の腿; *vitalam*—ヴィタラという名の天体系; *ca*—もまた; *atalam*—アタラという名の惑星; *ca*—そして; *mahītalam*—マヒータラという名の天体系; *tat*—それの; *jaghanam*—臀部; *mahīpate*—王よ; *nabhastalam*—宇宙空間; *nābhi-saraḥ*—臍のくぼみ; *gṛṇanti*—彼らはそのように解釈する。

宇宙体の膝はスタラという名の天体系で、そして２本の腿はヴィタラとアタラ天体系である。臀部はマヒータラ、宇宙空間は主の臍のくぼみである。

第２８節

उरःस्थलं ज्योतिरनीकमस्य
ग्रीवा महर्वदनं वै जनोऽस्य ।
तपो वराटीं विदुरादिपुंसः
सत्यं तु शीर्षाणि सहस्रशीर्ष्णः ॥ २८ ॥

uraḥ-sthalaṁ jyotir-anīkam asya
grīvā mahar vadanaṁ vai jano 'sya
tapo varāṭīṁ vidur ādi-puṁsaḥ
satyaṁ tu śīrṣāṇi sahasra-śīrṣṇaḥ

uraḥ—高い; *sthalam*—場所（胸）; *jyotiḥ-anīkam*—発光する惑星; *asya*—主の; *grīvā*—首; *mahaḥ*—発光惑星の上の天体系; *vadanam*—口; *vai*—正確に; *janaḥ*—マハルの上の天体系; *asya*—主の; *tapaḥ*—ジャナスの上の天体系; *varāṭīm*—額; *viduḥ*—〜として知られて; *ādi*—根源者; *puṁsaḥ*—人物; *satyam*—頂点の天体系; *tu*—しかし; *śīrṣāṇi*—頭; *sahasra*—1,000; *śīrṣṇaḥ*—複数の頭を持つ者。

巨大な姿を持つ根源の人格者の胸は発光天体系、首はマハル惑星、口はジャナス惑星、額はタパス天体系である。サッテャローカという頂点の天体系は1,000の頭を持つ主の頭部である。

要旨解説

太陽や月という輝く惑星は宇宙のほぼ中間に位置しているため、根源なる主の強大な体の胸とされています。その発光惑星の上に、宇宙の管理者である半神たちが住む天国マハル、ジャナス、タパスという天体系が位置し、その上にサッテャローカ天体系があり、そこには、ヴィシュヌ、ブラフマー、シヴァという物質自然界の様式を司る主要な管理者が住んでいます。このヴィシュヌはクシーローダカシャーイー・ヴィシュヌという名で知られ、全生命体の至高の魂として活動します。原因の海には無数の宇宙が浮かんでおり、その各宇宙には主のヴィラートゥの姿が、無数の太陽、月、天国の半神たち、ブラフマー、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァたちとともに存在し、『バガヴァッド・ギーター』（第10章・第42節）で述べられているように、そのすべてが主クリシュナの人智を絶する力の１つの部分に含まれています。

第２９節

इन्द्रादयो बाहव आहुरुस्राः
　　कर्णौ दिशः श्रोत्रममुष्य शब्दः ।
नासत्यदस्रौ परमस्य नासे
　　घ्राणोऽस्य गन्धो मुखमग्निरिद्धः ॥ २९ ॥

indrādayo bāhava āhur usrāḥ
　　karṇau diśaḥ śrotram amuṣya śabdaḥ
nāsatya-dasrau paramasya nāse
　　ghrāṇo 'sya gandho mukham agnir iddhaḥ

indra-ādayaḥ—天界の王インドラに率いられている半神達; *bāhavaḥ*—腕; *āhuḥ*—〜と呼ばれ

る; *usrāḥ*—半神達; *karṇau*—耳; *diśaḥ*—４つの方角; *śrotram*—聴覚; *amuṣya*—主の; *śabdaḥ*—音; *nāsatya-dasrau*—アシュヴィニ・クマーラとして知られる半神達; *paramasya*—至高者の; *nāse*—鼻孔; *ghrāṇaḥ*—嗅覚; *asya*—主の; *gandhaḥ*—香り; *mukham*—口; *agniḥ*—火; *iddhaḥ*—燃えさかる。

主の腕はインドラに率いられている半神たち、10の方角は主の耳、物理的音は主の聴覚を表わす。鼻孔は２人のアシュヴィニ・クマーラたち、物質的香りは嗅覚を表わす。主の口は燃えさかる炎である。

要旨解説

人格主神の巨大な姿の説明は『バガヴァッド・ギーター』の第11章にあり、『シュリーマド・バーガヴァタム』のこの部分でさらに説明されています。『バガヴァッド・ギーター』（第11章・第30節）の説明は、「ヴィシュヌよ。燃えさかるその口で、あなた様はあらゆる方角から飛びこんでくる者たちすべてを食い殺しています。そしてご自分の輝きで全宇宙を覆いつくし、恐ろしい灼熱の光を四方に放散されています」とあります。このように、『シュリーマド・バーガヴァタム』は『バガヴァッド・ギーター』を学ぶ人々にとって卒業後の研究と言えます。どちらもクリシュナ、絶対真理者の科学であり、相互依存しています。

至高主のヴィラートゥ・ルーパには、管理する半神と管理される生命体が含まれています。小さな１個の生命体の微細な部分でさえ、主の力の代表者によって支配されています。半神は主の巨大な姿に含まれているからこそ、主を崇拝することは、その対象が巨大な物質的概念でも、主シュリー・クリシュナという永遠かつ超越的な姿であっても、半神たちやその他すべての部分体を癒すことができ、それは木の根に水を注げばエネルギーが木の各部分に送られるのと同じです。したがって物質主義者にとっても、主の宇宙的な巨大な姿を崇拝すれば正しい道に導かれます。さまざまな望みを満たすために数多くの半神に救いを求めるような、まちがった崇拝で危険を冒す必要はありません。真の生命体は主自身であり、その他すべては想像にすぎません。すべては主の内だけに含まれているからです。

第３０節

द्यौरक्षिणी चक्षुरभूत्पतङ्गः
पक्ष्माणि विष्णोरहनी उभे च ।
तद्भ्रूविजृम्भः परमेष्ठिधिष्ण्य-
मापोऽस्य तालू रस एव जिह्वा ॥ ३० ॥

dyaur akṣiṇī cakṣur abhūt pataṅgaḥ
pakṣmāṇi viṣṇor ahanī ubhe ca
tad-bhrū-vijṛmbhaḥ parameṣṭhi-dhiṣṇyam
āpo 'sya tālū rasa eva jihvā

dyauḥ—宇宙空間; *akṣiṇī*—眼球; *cakṣuḥ*—目（諸感覚）の; *abhūt*—そのようになった; *pataṅgaḥ*—太陽; *pakṣmāṇi*—まぶた; *viṣṇoḥ*—人格主神、シュリー・ヴィシュヌの; *ahanī*—昼と夜; *ubhe*—両方; *ca*—そして; *tat*—主の; *bhrū*—眉; *vijṛmbhaḥ*—動き; *parameṣṭhi*—至高の生物（ブラフマー）; *dhiṣṇyam*—位置; *āpaḥ*—ヴァルナ、水の管理者; *asya*—主の; *tālū*—口蓋; *rasaḥ*—分泌物; *eva*—確かに; *jihvā*—舌。

宇宙空間は主の眼窩（がんか）、眼球は見る力としての太陽を表わす。主のまぶたは昼と夜、主の眉の動きのなかにブラフマーや同様の至上の人物たちが住んでいる。主の口蓋は水の管理者であるヴァルナ、万物の分泌液すなわちエキスは主の舌である。

要旨解説

この節の説明を聞くと、常識と矛盾しているかのように見えます。太陽は眼球と言われたり、またときには宇宙空間と説明されたりするからです。しかし、シャーストラの教えに常識が入る余地はまったくありません。シャーストラの説明をただ受けいれるべきであり、常識よりもヴィラートゥ・ルーパの姿のほうに信念を置くべきです。常識はいつでも不完全ですが、シャーストラの説明はいつでも完璧で完全です。矛盾と思われるのは、私たちの不完全さによるものであり、シャーストラが不完全だということではありません。それがヴェーダの知恵に近づく方法です。

第３１節

छन्दांस्यनन्तस्य शिरो गृणन्ति
दंष्ट्रा यमः स्नेहकला द्विजानि ।
हासो जनोन्मादकरी च माया
दुरन्तसर्गो यदपाङ्गमोक्षः ॥ ३१ ॥

chandāṁsy anantasya śiro gṛṇanti
daṁṣṭrā yamaḥ sneha-kalā dvijāni

hāso janonmāda-karī ca māyā
duranta-sargo yad-apāṅga-mokṣaḥ

chandāṁsi—ヴェーダ聖歌; *anantasya*—至高者の; *śiraḥ*—脳幹; *gṛṇanti*—彼らは言う; *daṁṣṭrāḥ*—あごの歯; *yamaḥ*—罪人の管理者、ヤマラージャ; *sneha-kalāḥ*—愛情という芸術; *dvijāni*—歯並び; *hāsaḥ*—微笑み; *jana-unmāda-karī*—もっとも惑わせるもの; *ca*—もまた; *māyā*—幻想エネルギー; *duranta*—超えられない; *sargaḥ*—物質創造界; *yat-apāṅga*—〜である者の一瞥; *mokṣaḥ*—〜を見渡している。

ヴェーダ聖歌を主の脳幹である、とかれらは言い、また主のあごの歯は罪人を罰するヤマ、死の神と言う。愛情という芸術は主の歯並び、もっとも魅惑的な幻想の物質エネルギーは主の微笑みである。物質創造界というこの広大な海は、私たちを見渡す主の一瞥である。

要旨解説

ヴェーダの見解によると、物質創造界は主が物質エネルギーを一瞥した結果であり、この節では、それがもっとも惑わせる幻想エネルギーである、と言われています。物質主義に惑わされている条件づけられた魂たちが知っておくべきことは、物質的で一時的な創造界はほんとうの世界の模造であり、主のそのような惑わせる一瞥に魅惑されている者たちは、ヤマラージャという罪人の支配者の管理下に置かれる、という事実です。主は、美しい歯を見せながら愛情をこめて微笑みます。主にまつわるこの真実を把握できる知的人物が、主に完全に身をゆだねる魂になるのです。

第３２節

व्रीडोत्तरौष्ठोऽधर एव लोभो
धर्मः स्तनोऽधर्मपथोऽस्य पृष्ठम् ।
कस्तस्य मेढ्रं वृषणौ च मित्रौ
कुक्षिः समुद्रा गिरयोऽस्थिसङ्घाः ॥ ३२ ॥

vrīḍottarauṣṭho 'dhara eva lobho
dharmaḥ stano 'dharma-patho 'sya pṛṣṭham
kas tasya meḍhraṁ vṛṣaṇau ca mitrau
kukṣiḥ samudrā girayo 'sthi-saṅghāḥ

vrīḍa—謙虚さ; *uttara*—上部; *oṣṭhaḥ*—唇; *adharaḥ*—あご; *eva*—確かに; *lobhaḥ*—切望; *dharmaḥ*—宗教; *stanaḥ*—胸; *adharma*—無宗教; *pathaḥ*—方法; *asya*—主の; *pṛṣṭham*—背中; *kaḥ*—ブラフマー; *tasya*—主の; *meḍhram*—性器; *vṛṣaṇau*—睾丸; *ca*—もまた; *mitrau*—ミトゥラー・ヴァルナ達; *kukṣiḥ*—腰; *samudrāḥ*—海; *girayaḥ*—丘; *asthi*—骨; *saṅghāḥ*—積み重ね。

慎ましさは主の臀部の上部、切望は主のあご、宗教は主の胸部、無宗教は主の背中である。物質界の生命体すべてを作りだしたブラフマージーは主の性器、ミトゥラー・ヴァルナたちは主の２つの睾丸である。海は主の腰、丘と山は主の骨の積み重ねである。

要旨解説

至高主は、知性の足らない思索家が誤解とは違い、非人格ではありません。主は至高の人物であり、それはすべてのヴェーダ経典も確証しています。だとしても、その人格性は私たちが思うものではありません。またここでは、ブラフマージーが主の性器として活動し、ミトゥラー・ヴァルナたちが主の睾丸と表現されています。これは、主は身体的器官をそなえた完璧な人物だということですが、各器官は同時に異なる機能を発揮できます。ですから「主は非人格である」と表現されるときは、その人格性は私たちの不完全な想像できるタイプとは違う、と理解しなくてはなりません。しかし、丘や山、海や空を見ても、ヴィラートゥ・ルーパという主の巨大な体の部分として崇拝できます。主クリシュナからアルジュナに示されたヴィラートゥ・ルーパは信じない者たちに対する挑戦なのです。

第３３節

नद्योऽस्य नाड्योऽथ तनूरुहाणि
महीरुहा विश्वतनोर्नृपेन्द्र ।
अनन्तवीर्यः श्वसितं मातरिश्वा
गतिर्वयः कर्म गुणप्रवाहः ॥ ३३ ॥

nadyo 'sya nāḍyo 'tha tanū-ruhāṇi
mahī-ruhā viśva-tanor nṛpendra
ananta-vīryaḥ śvasitaṁ mātariśvā
gatir vayaḥ karma guṇa-pravāhaḥ

nadyaḥ—川; *asya*—主の; *nāḍyaḥ*—血管; *atha*—そしてその後; *tanū-ruhāṇi*—体の毛髪;

mahī-ruhāḥ—植物と木; *viśva-tanoḥ*—宇宙体の; *nṛpa-indra*—王よ; *ananta-vīryaḥ*—全能者の; *śvasitam*—呼吸; *mātariśvā*—空気; *gatiḥ*—動き; *vayaḥ*—過ぎゆく時代; *karma*—活動; *guṇa-pravāhaḥ*—自然界の三様式の反動。

王よ。川は主の巨大な体の血管、木は主の毛髪、全能性は主の呼吸である。過ぎゆく時代は主の動き、主の活動は物質自然界の三様式の反動である。

要旨解説

人格主神は、いろいろな学派が言う貧弱な考え方とは違い、命のない石ではないし、無活動でもありません。主は時の流れとともに動きますから、現在の活動はもちろん、過去と未来についても知りつくしています。主にわからないものはなにもないのです。条件づけられた魂は物質自然界の様式の反動に動かされています。『バガヴァッド・ギーター』（第７章・第12節）で言われているように、自然界の様式は主の指揮だけで動いていますから、自然界は盲目的・自動的に動いているわけではありません。それらの活動の背後には主の監督があり、ですから、主は誤解されているように、なにもしていないわけではありません。ヴェーダは、至高主は個人的になにもすることはない、と言ってはいますが、優位の立場にいる人がいつもするように、すべては主の指揮で動いています。主の許可なくして１枚の葉さえ動かない、とよく言われます。『ブラフマ・サムヒター』（第５章・第48節）では、すべての宇宙、その宇宙の長たち（ブラフマー）は主の呼吸のあいだだけ存在している、と言われています。同じことがこの節でも確証されています。物質界で宇宙と惑星を存在させている空気は、不変のヴィラートゥ・ルーパの呼吸です。ですから、川、木、空気、過ぎゆく時代などを見れば、主には姿がないとする考えにまちがって導かれることなく、人格主神を認識することができます。『バガヴァッド・ギーター』（第12章・第５節）では、絶対真理の姿のない観念にきもちが強く傾いている人は、人物としての姿を思う知的な人よりも真理を理解するのは困難である、と言われています。

第３４節

ईशस्य केशान् विदुरम्बुवाहान्
　　वासस्तु सन्ध्यां कुरुवर्य भूम्नः ।
अव्यक्तमाहुर्हृदयं मनश्च
　　स चन्द्रमाः सर्वविकारकोशः ॥ ३४ ॥

īśasya keśān vidur ambuvāhān
vāsas tu sandhyāṁ kuru-varya bhūmnaḥ
avyaktam āhur hṛdayaṁ manaś ca
sa candramāḥ sarva-vikāra-kośaḥ

īśasya—至高の支配者の; *keśān*—頭髪; *viduḥ*—あなたは私からそれを知ることができる; *ambu-vāhān*—水を運ぶ雲; *vāsaḥ tu*—衣服; *sandhyām*—昼と夜の終わり; *kuru-varya*—クル家の最善者よ; *bhūmnaḥ*—全能者の; *avyaktam*—物質創造界の主要原因; *āhuḥ*—〜と言われている; *hṛdayam*—知性; *manaḥ ca*—そして心; *saḥ*—He; *candramāḥ*—月; *sarva-vikāra-kośaḥ*—すべての変化の源。

クル家のなかでもっとも優れた者よ。水を運ぶ雲は主の頭髪であり、昼と夜の終わりは主の衣服であり、物質創造界の至高の原因は主の知性である。主の心は、あらゆる変化の源である月である。

第３５節

विज्ञानशक्तिं महिमामनन्ति
सर्वात्मनोऽन्तःकरणं गिरित्रम् ।
अश्वाश्वतर्युष्ट्रगजा नखानि
सर्वे मृगाः पशवः श्रोणिदेशे ॥ ३५ ॥

vijñāna-śaktiṁ mahim āmananti
sarvātmano 'ntaḥ-karaṇaṁ giritram
aśvāśvatary-uṣṭra-gajā nakhāni
sarve mṛgāḥ paśavaḥ śroṇi-deśe

vijñāna-śaktim—意識; *mahim*—物質の原理; *āmananti*—彼らはそれをそう呼ぶ; *sarva-ātmanaḥ*—遍在する者の; *antaḥ-karaṇam*—自我; *giritram*—ルドラ（シヴァ）; *aśva*—馬; *aśvatari*—ロバ; *uṣṭra*—ラクダ; *gajāḥ*—象; *nakhāni*—爪; *sarve*—その他すべて; *mṛgāḥ*—雄鹿; *paśavaḥ*—四足獣; *śroṇi-deśe*—ベルトの部分に。

物質の原理（マハトゥ・タットヴァ）は、専門家たちが断言するように、遍在する主の意識、

そしてルドラデーヴァは主の自我である。馬、ロバ、ラクダ、象は主の爪、そして野生動物や四足獣は主のベルトの領域に位置している。

第３６節

वयांसि तद्व्याकरणं विचित्रं
मनुर्मनीषा मनुजो निवासः ।
गन्धर्वविद्याधरचारणाप्सरः
स्वरस्मृतीरसुरानीकवीर्यः ॥ ३६ ॥

vayāṁsi tad-vyākaraṇaṁ vicitraṁ
manur manīṣā manujo nivāsaḥ
gandharva-vidyādhara-cāraṇāpsaraḥ
svara-smṛtīr asurānīka-vīryaḥ

vayāṁsi—さまざまな鳥類; *tat-vyākaraṇam*—単語; *vicitram*—芸術的; *manuḥ*—人類の父; *manīṣā*—思考; *manujaḥ*—人類（マヌの息子達）; *nivāsaḥ*—住居; *gandharva*—ガンダルヴァという名の人間; *vidyādhara*—ヴィデャーダラ達; *cāraṇa*—チャーラナ達; *apsaraḥ*—天使達; *svara*—音楽的リズム *smṛtīḥ*—記憶; *asura-anīka*—悪魔的な兵士達; *vīryaḥ*—力。

さまざまな鳥類は主の天才的な芸術的感性を表わしている。人類の父・マヌは主の基準的知性の象徴、慈愛は主の住居である。ガンダルヴァ、ヴィデャーダラ、チャーラナ、天使など、天界に住む人類は主の音楽的リズムの、悪魔的兵士は主の驚異的な力の表われである。

要旨解説

主の美的感性は、孔雀、鸚鵡（おうむ）、カッコーなど、芸術的で色彩鮮やかなさまざまな鳥類の創造に表われています。ガンダルヴァ、ヴィデャーダラたちといった神聖な人類の生物たちはすばらしい歌声を聞かせ、天界の半神たちの心さえとりこにすることができます。音楽的リズムは主の音楽的センスの表われです。ならば、主が人物でないはずがありません。主の音楽と芸術の感性、決して誤ることのない基準的知性は主の至高の人格を表わす印です。『マヌ・サムヒター』は人類にとって基準となる法律書であり、全人類が、社会の規範を収めるこのすばらしい書物に従うよう勧められています。人間社会は主の居住地です。つまり、人は神を悟るために、そして神と交流するために生きている、ということです。この生涯は条件づけられ

た魂が永遠の神の意識をよみがえらせ、人生の使命をまっとうさせる機会です。マハーラージャ・プラフラーダは、アスラの家系に生まれた主の代表者の正しい模範と言えます。主の巨大な体と離れている生命体はいません。すべての生命体が至高の体と関係した特定の義務を持っているのです。各生命体に割り与えられた特定の義務が遂行できなければ、生命体のあいだで不調和が生じるのですが、至高主との関係をとおして生命体同士が結ばれれば、野生動物と人間でさえ完全に融和することができます。主チャイタンニャ・マハープラブはその生きた調和をマディヤ・プラデーシュのジャングルで見せています。虎や象、そして獰猛な動物たちが完全に調和したなかで至高主を讃えました。それが全世界に平和と親交を築く方法なのです。

第３７節

ब्रह्माननं क्षत्रभुजो महात्मा
विड्ऊरुरङ्घ्रिश्रितकृष्णवर्णः ।
नानाभिधाभीज्यगणोपपन्नो
द्रव्यात्मकः कर्म वितानयोगः ॥ ३७ ॥

brahmānanaṁ kṣatra-bhujo mahātmā
viḍ ūrur aṅghri-śrita-kṛṣṇa-varṇaḥ
nānābhidhābhījya-gaṇopapanno
dravyātmakaḥ karma vitāna-yogaḥ

brahma—ブラーフマナ; *ānanam*—顔; *kṣatra*—クシャトリヤ; *bhujaḥ*—腕; *mahātmā*—ヴィラートゥ・プルシャ; *viṭ*—ヴァイシャ; *ūruḥ*—腿（もも）; *aṅghri-śrita*—主の御足に守られている; *kṛṣṇa-varṇaḥ*—シュードラ; *nānā*—様々な; *abhidhā*—名前で; *abhījya-gaṇa*—半神; *upapannaḥ*—追いつかれて; *dravya-ātmakaḥ*—可能な品物で; *karma*—活動; *vitāna-yogaḥ*—儀式の執行。

ヴィラートゥ・ルーパの顔はブラーフマナ、主の腕はクシャトリヤ、太ももはヴァイシャであり、シュードラは主の御足に守られている。崇拝に値するすべての半神も主の支配下にあり、主をなだめるために、可能なかぎりの材料を使って儀式をすることは、万民の義務である。

要旨解説

この節では一神教について言及されています。半神にさまざまな名称の儀式を捧げることはヴェーダ経典で勧められていますが、この節では、その半神たちでさえ最高人格主神の姿のな

かに含まれている、と言われています。根源の全体者の部分体にすぎないのです。同じように、人間社会の区分、すなわちブラーフマナ（知識階級）、クシャトリヤ（管理者）、ヴァイシャ（商業者階級）、シュードラ（労働者階級）は、すべて至高者の体のなかに含まれています。ですから、捧げるにふさわしい品物をすべて使って、至高者を喜ばせる儀式を執行するよう勧められています。一般的に、儀式は純粋なバターと穀物を捧げて行なわれますが、時代が進むにつれ、人間社会では、神の物質自然界が提供する物資を作りかえて、さまざまな物品を生産できるようになりました。ですから私たちは、*浄化されたギーだけを使った儀式を捧げるのではなく、主の栄光を広めるなかで、生産されたその他の品物も使って捧げることを学ばなくてはなりません*。知識階級者・ブラーフマナは、先代のアーチャーリャたちの意見を参考にして、そのような儀式執行を指示することができます。管理者階級は、その儀式ができる環境をすべて整えることができます。穀物を生産するヴァイシャ、すなわち商業者階級は、儀式のためにさまざまな品々を用意することができます。そしてシュードラも、その儀式が首尾よく行なわれるよう肉体労働をとおして仕えることができます。このように人間社会全体が協力しあい、現代に勧められている儀式、すなわち主の聖なる名前を集まって唱えるという儀式を、世界中の人々の共通の繁栄のために実践することができるのです。

第３８節

इयानसावीश्वरविग्रहस्य
　यः सन्निवेशः कथितो मया ते ।
सन्धार्यतेऽस्मिन् वपुषि स्थविष्ठे
　मनः स्वबुद्ध्या न यतोऽस्ति किञ्चित् ॥ ३८ ॥

iyān asāv īśvara-vigrahasya
　yaḥ sanniveśaḥ kathito mayā te
sandhāryate 'smin vapuṣi sthaviṣṭhe
　manaḥ sva-buddhyā na yato 'sti kiñcit

iyān—これらすべて; *asau*—それ; *īśvara*—至高主; *vigrahasya*—その姿の; *yaḥ*—なんでも; *sanniveśaḥ*—位置されているように; *kathitaḥ*—説明した; *mayā*—私によって; *te*—あなたに; *sandhāryate*—集中できる; *asmin*—この中に; *vapuṣi*—ヴィラートゥの姿; *sthaviṣṭhe*—その濃密なものに; *manaḥ*—心; *sva-buddhyā*—人の知性によって; *na*—〜ではない; *yataḥ*—主を超えて; *asti*—〜がある; *kiñcit*—ほかのすべて。

これまで、濃密な物質と巨大な人格主神の様相について説明してきた。解放を真剣に求める者は主のこの姿に心を集中させようとする。物質界にはそれ以上のものはないからである。

要旨解説

最高人格主神は『バガヴァッド・ギーター』（第９章・第10節）で、物質自然界は主の命令を実行する代理者にすぎない、と明言しています。物質自然界は主のさまざまな力の一つであり、主の指揮があってこそ機能します。主は至高の超越的主だからこそ、主が物質原理をただ見つめるだけで物質が刺激されはじめ、その結果、物質界の活動が６種類の連続的な変化としてつぎつぎに表わされます。物質創造界すべては、このように時の流れとともに現われ、そして消えていくのです。

貧弱な知識しかなく、そして知性の足らない人々は、人間のように姿を見せる主シュリー・クリシュナの人智を絶する力がどうしてもわかりません（BG. 9.11）。物質界で、私たち人間の一人として現われるのは、堕落した魂たちへのいわれのない慈悲心によるものです。主は物質的概念をすべて超えた方ですが、純粋な献愛者に対する尽きることのない慈悲の思いから、人格主神として表われるために物質界に降りてきます。物質主義の哲学者や科学者は原子力や宇宙体の巨大な様相に囚われすぎているため、真実の姿である精神的存在よりも物質的表われである外的現象界のほうに真剣に敬意を払っています。主の超越的な姿は、物質的活動の範囲を超えており、自分たちの経験だけでものを考える物質主義的哲学者や科学者には、主が同時に局所とすべての場所に存在できるという事実がひじょうにわかりづらくなります。至高主の人物としての姿を受けいれられないかれらに、主は優しい心から、超越的な姿であるヴィラートゥの様相を見せ、その姿をシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが鮮やかに説明しています。主が結論しているのは、この巨大な姿を超えるものはなにもない、という点です。物質主義的な思考力に恵まれていても、この巨大な姿の概念を超えたものは理解できません。物中心に考える人の心はいつも不安定で、1つの対象から別の対象にたえず移り変わっています。ですからそういう人たちは、主の巨大な体のどの部分でもいいから知性を使って考え、主の物質界の表われ――森、丘、人間、動物、半神、鳥、獣、あるいは他の生物すべて――のなかに主を思いうかべることができます。物質現象界にあるものすべては、巨大な姿である体の一部になっているのであり、そう考えることでゆれ動く心を主だけに固定させることができます。主のさまざまな体の部分に集中するという方法は、神を無視する悪魔的な挑戦を徐々に消し、しだいに主への献愛奉仕という段階に私たちを高めていきます。すべては完全全体者の部分ですから、初心の生徒は、至高主は遍在すると説いている『シュリー・イーシャ・ウパニシャッ

ド』の聖歌の意味を徐々に理解し、やがて主の体にどのような冒涜も冒さない方法を学んでいきます。神を中心にしたこの感覚は、神の存在に挑戦する傲慢さを消していきます。こうして、いっさい万物に敬意を払うきもちを学んでいきます。すべては至高の体を持つ方・至高者の部分体だからです。

第３９節

स सर्वधीवृत्त्यनुभूतसर्व
आत्मा यथा स्वप्नजनेक्षितैकः ।
तं सत्यमानन्दनिधिं भजेत
नान्यत्र सज्जेद् यत आत्मपातः ॥ ३९ ॥

sa sarva-dhī-vṛtty-anubhūta-sarva
ātmā yathā svapna-janekṣitaikaḥ
taṁ satyam ānanda-nidhiṁ bhajeta
nānyatra sajjed yata ātma-pātaḥ

saḥ—彼（至高の人物）; *sarva-dhī-vṛtti*—あらゆる種類の知性を使った悟りの方法; *anubhūta*—認識して; *sarve*—だれもが; *ātmā*—至高の魂; *yathā*—できる限り; *svapna-jana*—夢を見ている人; *īkṣita*—～に見られて; *ekaḥ*—まったく同じ; *tam*—主に; *satyam*—至高の真理者; *ānanda-nidhim*—至福の海; *bhajeta*—崇拝しなくてはならない; *na*—決して～ない; *anyatra*—他のすべて; *sajjet*—執着して; *yataḥ*—それによって; *ātma-pātaḥ*—自分の堕落。

人が夢のなかで無数の現象を作りだすように、みずからを多くの現象界のなかに浸透させている最高人格主神に心を集中させなくてはならない。唯一の、そしてすべてにおいて喜びに満ちた絶対真理者だけに心を向けなくてはならない。それができなければ、まちがって導かれ、堕落させていくしかない。

要旨解説

この節では献愛奉仕の方法が、偉大なゴースヴァーミーであるシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって間接的にしめされています。自己を悟るさまざまな方法にきもちを逸らすのではなく、悟り・崇拝・熱意をそそぐもっとも気高い方である最高人格主神だけに集中しなくてはなりません。自己の悟りとは、これまで説明したきように、物質界での生存競争に対して、

永遠な生活を手にいれるために挑戦することなのですから、物質エネルギーの幻想のために、ヨーギーや献愛者たちは、屈強の兵士でさえ物質存在にふたたび縛りつけるような数々の誘惑に直面します。ヨーギーは修行の結果としてアニマーやラギマーなどの奇跡的成功を達成し、もっとも小さいものよりも小さくなり、もっとも軽いものより軽くなり、あるいは一般的意味で、富や女性の形で物質的恩恵を手にいれます。しかし、そのような魅力への警戒もあり、物質的でもあるその喜びにおぼれてしまうのは、みずからを堕落させ、さらに物質界に閉じこめられることになります。この警告を胸に、油断のない知性に従わなくてはなりません。

至高主は一人であり、主の拡張体は無数です。だから主は万物の超霊魂（至高の魂）なのです。私たちがなにを見ようと、その視野は二次的であり、まず主の視野が中心であることを知らなくてはなりません。主が最初に見なければ、私たちはなにも見ることができないのです。ヴェーダやウパニシャッドがそう教えています。なにを見ても、なにをしても、見たりしている対象の至高の魂は主です。個々の魂と至高の魂のあいだにあるこの「同時に一つで異なる」という理論は、主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブがアチンテャ・ベーダーベーダ・タットヴァ（*acintya-bhedābheda-tattva*）の哲学として説いています。ヴィラートゥ・ルーパ、すなわち至高主の巨大な様相には、物質的な表われはすべて含まれていますから、ヴィラートゥ・主の巨大な様相は全生物と無生物の至高の魂です。しかしヴィラートゥ・ルーパはナーラーヤナあるいはヴィシュヌの表われでもあり、さらに悟りの理解を高めれば、最終的に、主クリシュナが存在するものすべての窮極の超霊魂であることが見られるようになります。結論として、私たちはためらうことなく主クリシュナの崇拝者になり、さらに、主の完全拡張体であるナーラーヤナだけの崇拝者にならなくてはならない、と言えます。ヴェーダの聖歌には、最初にナーラーヤナが物質を見つめ、それが創造になった、と明言されています。創造のまえにはブラフマーもシヴァもいなかったのですから、ほかの生物がいなかったのは言うまでもありません。シュリーパーダ・シャンカラーチャーリャは「ナーラーヤナは物質創造界を超えた方であり、他のすべての生命体は物質創造界の内にいる」という考えに納得しています。ですから、物質創造界全体はナーラーヤナと一つ、そして同時に違うのであり、このことが主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブのアチンテャ・ベーダーベーダ・タットヴァ哲学を支持しています。物質創造界はナーラーヤナの視力から作られたのですから、主と同じです。しかし、主の外的エネルギー（バヒランガー・マーヤー）の結果であること、また内的力（アートマ・マーヤー）から離れていることで、同時に、創造界は主とは別の存在だとも言えます。この節には「夢を見ている人」の例が巧みに説明されています。夢を見ている人はその夢の世界で次々に物事を作りあげ、自分自身もその夢を見ている者としてそのなかに絡まっており、その結果

に惑わされています。物質創造界も主の夢のような創造と言えるのですが、主は超越的な超霊魂ですから、夢のような創造界の反動に絡まることも、影響を受けることもありません。主はいつでも超越的な境地にいますが、本質的に主はすべてであり、またすべては主から離れています。私たちは主の部分ですから、主だけに専念しなくてはなりません――逸れることなく。それができなければ、次々に物質創造界の力に征服されます。『バガヴァッド・ギーター』（第９章・第７節）で次のように確証されています。

sarva-bhūtāni kaunteya
　prakṛtiṁ yānti māmikām
kalpa-kṣaye punas tāni
　kalpādau visṛjāmy aham

「クンティーの子よ。物質現象界すべてが創造期の終わりにわたしのうちに入り、次の創造期が始まるとき、わたしは自分の力を使ってふたたび物質創造界を作りだす」

しかし人間生活は、創造と破壊の繰りかえしから抜けだす機会です。主の外的力から抜けだし、主の内的力のなかに入る機会でもあるのです。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第２編・第１章、「神を悟る第一歩」の要旨解説を終了します。